三重県埋蔵文化財調査報告123-6

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ

山ノ花・甘チ・北上遺跡

１９９６．１１

三重県埋蔵文化財センター

序

「温故知新」という言葉が示すように、過去の記録を調査・研究・分析することは、これからの人類の進むべき方向の道標を得ることにつながります。

埋蔵文化財は、土に埋もれた、あるいは刻まれた過去の記録で、私たちの祖先がその時代を懸命に生きた証です。

一般国道42号松阪・多気バイパス路線内にも埋蔵文化財がたくさん残っていることがわかりました。これらは、一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものであることは言うまでもありません。しかし一方で、自動車の運搬力や機動力は現代の生活に欠くことができないものとなり、道路の建設や改良は公共事業の緊急課題となっています。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設との調和を測るため、建設省等関係機関と協議を重ねてきました。その結果、バイパスの建設工事によって、どうしても保存のできない遺跡については、発掘調査によって記録として残すことになりました。

今回報告するのは、松阪市内の５遺跡についての発掘調査結果です。本書が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史、文化を未来に伝える一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、（社）中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位、地元の方々などからご理解、ご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成８年11月

三重県埋蔵文化財センター

所長　奥　村　敏　夫

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成7・8年度に整理・報告書作成業務を実施した、山ノ花・廿チ・北上・御堂山・中野前遺跡の発掘調査報告書である。廿チ遺跡は、東牛込遺跡を小字名にしたがって名称変更したものである。

2．現地発掘調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ・Ⅴ・Ⅵで紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。

4．本書に使用した事業計画図面は、建設省紀勢国道工事事務所の提供により、他に建設省国土地理院発行の地形図、松阪市作成の都市計画図を使用した。

5．本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物図面の作成は、調査・報告担当者のほか、調査補助員・業務補助員が行った。執筆分担については目次に示し、さらに文末にも記した。

6．図面における方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北を用いた。
　なお、真北は座標北のN0°18′44″W、磁北は座標北のN6°48′44″Wである。

7．本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

8．本書の作成にあたっては、藤澤良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）の御教示を得た。

9．本書では、土層及び遺物の色調について、小山・竹原編『新版標準土色帖』(9版1989)を使用した。

10．本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ．前　　言……（田村陽一・森川常厚）…1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の体制……3
　3．現地調査の方法……6
　4．調査の経過……7
Ⅱ．位置と環境……（森川常厚）…10
Ⅲ．山ノ花遺跡……（松本美先）…12
　1．層　序……12
　2．調査の成果……13
　3．結　語……17
Ⅳ．廿チ・北上遺跡……（小林　秀）…19
　1．廿チ遺跡……19
　2．北上遺跡……22
Ⅴ．範囲確認調査……25
　1．御堂山遺跡……（宇河雅之）…25
　2．中野前遺跡……（東　良樹・森川常厚）…26

挿図目次

Ⅰ．前　言
第1図　路線、工区、遺跡位置図……2
Ⅱ．位置と環境
第2図　遺跡位置図……11
Ⅲ．山ノ花遺跡
第3図　遺跡地形図……12
第4図　調査区位置図……13
第5図　遺構平面図……14
第6図　土層断面図―①……15
第7図　土層断面図―②……16
第8図　遺物実測図……16
Ⅳ．廿チ・北上遺跡
第9図　遺跡地形図……19
第10図　調査区位置図……20
第11図　廿チ遺跡遺構平面図……20
第12図　廿チ遺跡土層断面図……21
第13図　北上遺跡遺構平面図……22
第14図　北上遺跡土層断面図……22
第15図　北上遺跡遺物実測図……23
Ⅴ．範囲確認調査
第16図　御堂山遺跡地形図……25
第17図　御堂山遺跡試掘坑配置図……25
第18図　中野前遺跡地形図……26
第19図　中野前遺跡試掘坑配置図……26
第20図　中野前遺跡遺物実測図……26

写真目次

山ノ花遺跡
調査区全景……27
作業風景……27
出土遺物……28
廿チ遺跡
調査前風景……29
調査区全景……29
溝……30
北上遺跡
調査区全景……30
出土遺物……31～32

表　目　次

第1表　遺跡概況……3
第2表　松阪・多気バイパス調査経過、予定表…4
第3表　現地説明会一覧表……7
第4表　発掘調査遺跡一覧表……9
第5表　遺物観察表（山ノ花遺跡）……17～18
第6表　遺物観察表（北上遺跡）……24

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置する、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目ざましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現在でも三重県南部の東紀州地域や南勢地域への幹線道路の交点に位置することに変わりはない。

1．バイパスの建設計画

一般国道42号は和歌山県和歌山市を起点とし、紀伊半島沿岸の諸都市を連絡し、三重県津市に至る幹線道路である。東紀州方面から松阪市への入口にあたる櫛田川に架かる両郡橋付近は、道路幅員が狭いため慢性的な交通渋滞に悩まされている。また、松阪市内も幹線道路の市街地集中のため、激しい交通渋滞が繰り返されており、交通環境が極度に悪化している。

これらの状況を抜本的に解消する方策として、多気郡多気町仁田から松阪市古井町に至る延長11.9kmの、松阪市街地の環状機能も併せ持ち、さらに周辺の土地利用の拡大・工業開発の促進等、地域の活性化をも期待する一般国道42号松阪・多気バイパスが計画されたのである。

計画路線は第1図のように、9・10・11・12の4つの工区に分けられている。9工区は多気町仁田～松阪市中万町の3.1km、10工区は松阪市中万町～同市八太町の1.4km、11工区は松阪市八太町～上川町の5.0km、12工区は松阪市上川町～古井町の2.4kmである。

バイパス建設事業は昭和59（1984）年5月4日に11・12工区が、昭和62（1987）年2月3日に都市計画決定がなされた。昭和62年度中に9工区は事業化され、翌63(1988)年度には用地買収に着手、平成元(1989)年度には、10～12工区も事業化され用地買収も開始された。

2．埋蔵文化財の保護協議

一方、この道路建設事業にかかる埋蔵文化財保護についての調整・協議は、昭和63年11月に建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所から、9工区の埋蔵文化財の有無について三重県教育委員会に照会があった。これを受けて、県教育委員会文化課では分布調査を実施、9工区(3.1km)内に9カ所、面積にして38,250㎡の埋蔵文化財が所在することが判明した。この結果をもとに紀勢国道工事事務所と第1回の協議を行い、事業の全体計画の説明を受けた。文化課からは、全面が遺跡とした場合の調査期間、調査経費、必要調査員数等の概略資料を提示した。この段階では用地買収も進んでおらず、平成元年度中の文化財調査はあり得ないと判断した。そして、昭和63年12月2日付け教文第1684号で、正式に分布調査結果を紀勢国道工事事務所長あてに通知した。この時点で10～12工区の計画図面が追加提示され、予定路線内の埋蔵文化財の有無について、分布調査依頼があった。

なお、建設省から出される文化財保護法57条3による文化庁への通知はこの間に行われている。

平成元年3月から4月にかけて、10～12工区(8.8km)内の埋蔵文化財分布調査を新設の三重県埋蔵文化財センターで実施した。その結果5カ所、29,300㎡の埋蔵文化財の所在を確認し、平成元年5月9日付け教埋第72号で紀勢国道工事事務所長あてに通知した。

このような経緯を経て、7月には第2回目の協議を行った。当センターから分布調査の結果並びに各遺跡の状況等の説明を、建設省からは用地買収状況の説明が行われた。そして、建設省側から平成2年度から試掘調査を、3年度から本格的な調査を開始し

第１図　路線、工区、遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院　松阪・国束山　1:25,000）

てほしい旨の要望が出された。

8月には当センターから、試掘調査の面積とその具体的方法について建設省に提示したが、しばらく進展はみられなかった。

年が改まった平成2(1990)年2月13日に第3回目の協議が行われた。この協議では9工区の用地買収状況が主課題となり、この場で建設省より再度、平成2年度からの文化財調査開始の要請があった。これを受けて、3月に当センターと建設省の間で全体計画や調査体制などの具体的な最終協議を行い、さし迫った期間と予算枠の中で、平成2年度から部分的に文化財調査を開始することを決定した。これによって、当面は第9工区の現地発掘調査のみを対象にし、2年度は試掘調査として2,000m²と本調査を2,000m²の計4,000m²を発掘調査することとし、調査担当職員を2名あてることが決まった。

以上のような経過を経て、平成2年度には当埋文センター管理指導課内に2名の松阪・多気バイパス担当職員を配置し、事業地内の文化財調査を開始するに至った。

2．調査の体制

昭和61（1986）年度以降に一般国道1号亀山バイパスで、昭和63年度からの一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査事業で採用された、いわゆる三者体制を当該事業でも採り入れた。すなわち、三重県

番号	遺跡名	所在地	確認面積m²	現状	種類	時代	概要	工区
1	明気窯跡群	多気町相可字明気	2,000	山林	散布地 窯跡	古墳	平成4～5年度調査。須恵器窯5基、竪穴住居等を確認。	9工区
2	明気古墳群	多気町相可字明気	900	山林	古墳	古墳	平成3年度多気町教委試掘で7号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施。	
3	甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成3年度試掘調査実施。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	巣護遺跡 （多気条里）	多気町荒蒔字巣護ほか	7,500	水田	散布地 条里	古墳～中世	平成5年度調査。明確な条里遺構は確認できず。前方後方周溝墓を検出したほか、石帯出土。	
5	上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外	6,000	畑 水田	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	平成5年度第1次、6年度第2次調査実施。縄文～中世の遺構・遺物。	
	栂ノ世古遺跡	多気町相可字栂ノ世古		宅地	散布地	中世	上ノ垣外遺跡3次調査として平成8年度に実施。弥生～古墳・平安・室町時代の遺物が出土。	
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文	平成6年度第1次、平成8年度第2次査。縄文時代後期前葉の竪穴住居や土坑を多数確認。	
7	鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	11,200	水田 宅地	集落跡	縄文 弥生～中世	平成2～6年度調査。縄文時代早期、弥生、奈良～平安時代の集落跡、墓跡等を確認。	
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	5,200	水田	集落跡	縄文 古墳～中世	平成3年度調査。奈良～平安時代の集落跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成2年度試掘調査実施。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器樽形、壺片、円筒埴輪片出土	
10	中野前遺跡 （石津）	松阪市下村町字石津	4,200	水田	散布地	中世	平成6年度試掘調査実施。遺構は確認できず、遺物は客土からのため、本調査にいたらず。	11工区
11	廿チ遺跡 （東牛込）	松阪市上川町字廿チ	3,700	水田	散布地	中世	平成7年度調査。ほ場整備時に削平を受け、遺構の残存わずか。	
	北上遺跡	松阪市上川町字北上		水田	散布地	古墳～奈良	古代官道の検出を目的に平成7年度確認調査。官道は検出できず。古墳～奈良の自然流水路検出。	
12	堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成6～8年調査。弥生～室町時代の遺構を多数確認。同時代の土器・銅鐸形土製品・斎串出土。	12工区
13	御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成4年度試掘調査実施。遺構・遺物ともに確認できず、本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成7年度調査。中世の遺構をわずかに検出。遺跡の周辺部と判断。	
15	大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成5年度工事中発見。直径約20m、高さ約2mの円墳。主体部なし。他に丘陵斜面に主体部2基	9工区

第1表　遺跡概況

教育委員会（受託者）は建設省（委託者）と調査に関する委託契約を結ぶ一方、建設省（委託者）は外郭団体である（社）中部建設協会（受託者）と現場作業に係る作業員の任用や労務管理、各種機材の手配等といった土工部門に関した委託契約を結ぶ。そして、国・県・協会の三者間の協力関係を明らかにするため三者で協定を結ぶことで、当該事業を推進しようという方法である。

この三者体制については、【三重県埋蔵文化財発掘調査報告100-4『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994・3，p.2～15】に詳しいので、それを参照されたい。

調査は三重県埋蔵文化財センターが担当した。平成2年度は現地調査担当が管理指導課内におかれたが、3年度以降は調査二課第二係として独立し、当該事業の調査に専念することになった。

平成5年度からは現地調査と並行して報告書作成も開始した。報告書作成は基本的にひとつの遺跡について2年間で整理・報告する形をとり、初年度に遺物整理を行い２年度で報告書の編集・印刷・刊行を行うことにした。平成5年度は1名、同6年度は2名、同7・8年度は3名の職員が、整理・報告書作成作業を担当した。

また、平成5年度からは「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づいて、松阪市および多気町の両教育委員会から各1名、計2名の職員を派遣していただいて調査体制を強化、充実した。以下は平成2年度～8年度の調査体制である。

工区	No.	遺跡名	調査対象面積(m²)			調査面積(m²)									備考
			確認面積	5.4.1協定	7.3.31現在	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
9工区	1	明気窯跡群	2,000	2,900	2,900			範 1,500	1,400	報Ⅰ					
	2	明気古墳群	900	0	0										平成４年度多気町教委調査
	3	甘糟遺跡	2,650	0	0		範			報Ⅰ					試掘調査の結果、本調査の必要なし
	4	巣護遺跡	7,500	2,300	2,300		範		2,300	報Ⅰ					多気町条里遺構を名称変更
	5	上ノ垣外遺跡	6,000	5,000	5,000	範		範	1,950 ※ 112	3,050 ※ 64	報Ⅱ				
		栂ノ世古遺跡									範	50 報Ⅲ			上ノ垣外遺跡３次調査区を名称変更
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600				範	1,100 ※333	範	500 報Ⅲ ※114			
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,560	範1,500 ※ 850	460	3,500 ※2,321	5,800 ※2,200	1,300			報Ⅳ		遺構・遺物多数のため整理に３カ年
	8	朱中遺跡	5,200	5,200	5,200	範	4,800 ※ 900			400	報Ⅴ				
	9	朱中古墳	400	0	0	範					報Ⅴ				試掘調査の結果、本調査の必要なし
	15	大日山古墳群	600	—	600					600 報Ⅰ					平成５年度工事中新発見
11工区	10	中野前遺跡	4,200	4,200	0					範		報Ⅵ			石津遺跡を名称変更、本調査の必要なし
	11	廿チ遺跡	3,700	3,700	1,600					範	1,600	報Ⅵ			東牛込遺跡を名称変更
		北上遺跡													トレンチ調査
12工区	12	堀町遺跡	9,200	9,200	9,700				範	3,000	3,100	範 4,700	3,500	報Ⅶ	
	13	御堂山遺跡	8,100	0	0			範				報Ⅵ			試掘調査の結果、本調査の必要なし
	14	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300					範	1,300	報Ⅵ			
調査面積合計		範囲確認調査				622	1,052	850	452	496	96	270	—		
		本調査				1,500 ※ 850	5,260 ※ 900	5,000 ※2,321	11,450 ※23,12	9,450 —	6,000 —	5,250 ※ 114	3,500 —		
		合計	38,250	52,800	42,760	2,122 ※ 850	6,312 ※ 900	5,850 ※2,321	11,902 ※23,12	9,946 —	6,096 —	5,520 —	(　)		

第２表　松阪・多気バイパス調査経過、予定表（平成８年１月現在、範…範囲確認調査　報…報告書作成　※は下層面積）

【平成２年度】

所長　中林昭一
次長　森下和光
次長兼調査第二課長　山澤義貴
主査　新田　洋
管理指導課主事　河瀬信幸、小林　秀
総務課長　青木真一
主事　堀内念伸、寺前秀紀

【平成３年度】

所長　中林昭一
次長　東谷　勇
次長兼管理指導課長　山澤義貴
調査第二課長　新田　洋
主査　田中喜久雄
技師　野原宏司
総務課長　青木真一
主事　堀内念伸、寺前秀紀

【平成４年度】

所長　久保富子
次長　東谷　勇、山澤義貴
調査第二課長　新田　洋
主査　駒田利治
第二係長　田村陽一
主事　宇河雅之
総務課長　小柳　清
主事　堀内念伸、寺前秀紀

【平成５年度】

所長　久保富子
次長　若林祥男、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査　倉田直純
第二係長　田村陽一
主事　東　良樹、宇河雅之
西村修久（多気町より派遣）
小濵　学（松阪市より派遣）
総務課長　小柳　清
主事　伊藤直樹、寺前秀紀

【平成６年度】

所長　川村政敬
次長　若林祥男、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主事　下平康弘、東　良樹
西村修久（多気町より派遣）
小濵　学（松阪市より派遣）
総務課長　小柳　清
主事　伊藤直樹、橋川　功

【平成７年度】

所長　川村政敬
次長　田中　守、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主査　清水正明
主事　下平康弘、松本美先
小林　秀
西村修久（多気町より派遣）
小濵　学（松阪市より派遣）
総務課長　中西勝之
主事　伊藤直樹、橋川　功

【平成８年度】

所長　奥村敏夫
次長　田中　守、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　山田　猛
主査　清水正明
第二係長　森川常厚
主事　松本美先、小濵　学
兼古　愼（松阪市より派遣）
小山憲一（多気町より派遣）
総務課長　中西勝之
主事　尾崎嘉春、橋川　功

以上のほか、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

調査補助作業員

河角龍典（立命館大学）　瀬野弥知世（皇學館大学）
塚田幸子（皇學館大学）　松井理栄子（橘女子大学）
加藤里江（皇學館大学）　奥　明子（松阪女子高校）
高谷典子（松阪女子高校）

業務補助員

谷久保美知代　山分孝子　中里輝子　広瀬則代
白石みよ子　山路艶子　廣田洋子　北川ゆき
服部美奈子　中村敬子　脇葉輝美　瀬野弥知世

3．現地調査の方法

調査の対象となる遺跡には、縄文時代から中・近世にわたる集落遺跡や墓地跡、古墳群や須恵器窯跡群など多種多様なものがあった。そのため、統一的な調査方法をとることは不可能であり、各遺跡の性格に応じた調査方法を適宜採用したここでは、原則的な調査方法について示しておきたい。

1．地区割

バイパス計画路線は9工区および11・12工区においてはほぼ南北方向をとるため、4m方眼で設定する地区杭は、各遺跡ごとに適切な道路中心杭2点を結ぶ延長方向に、北から南へ数字を、これと直行する方向には西から東へアルファベットを与え、各グリッドの北西杭をそのグリッドの名称とした。

なお、今回の調査では100m単位で設定する大地区は設定しなかった。

2．遺構カード

遺構カードは原則として4m×4mのグリッドごとに作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係、埋土の色調・状態等を明示することにした。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付し、土坑、溝、竪穴住居跡などについては遺跡ごとの通し番号をつけることにした。

また、遺構を掘削した場合は、掘削完了日と出土遺物についても、遺構カードに記入することとした。

3．遺構略測図

遺構の検討や遺物の整理等のため、遺構カードをもとに、100分の1の遺構略測図を作成した。

4．写真撮影

遺構等の写真撮影は、原則として6×7cm版（モノクロ、カラーポジ）を使用した。この他全景や特殊遺構などについては4×5インチ版（モノクロ、カラーポジ）、報道依頼関係に使用するカラーネガ（35ミリ版）も必要に応じて使用した。

使用したカメラは、アサヒペンタックス6×7、ニコンＦ301、ウィスタＳＰ（4×5インチ版）、マミヤＲＺ67である。

5．遺構実測

道路工事計画に関する杭は全て国土座標に基づいている。そのため、将来予想される隣接地での発掘調査との関連が把握できるように、遺構実測は国土座標に基づいておこなった。当地域は第Ⅵ座標系に属する。

遺構実測は現地調査期間の短縮のため、空中写真測量を原則としつつ、遣り方実測も随時実施した。また、各遺構の遺物出土状況図など詳細な実測図は全て手書きで行った。

なお、遺構実測図には地区杭も表示するようにした。

6．公開・普及

現地調査が終了し、遺構実測も終了もしくはほぼ終わる段階で、一般住民を対象に調査成果の公開と、埋蔵文化財に対する認識を深めてもらうことを目的として、可能な限り現地説明会を実施した。これまでに、鴻ノ木遺跡・明気古窯跡群・上ノ垣外遺跡・新徳寺遺跡・堀町遺跡等で9件の説明会を行い、延べ1000人以上の参加を得た。

なお、現地説明会の時には説明資料として『国道42号バイパス松阪・多気発掘調査だより』を刊行している。

また、小学校の依頼による体験発掘を実施し、津市立片田小学校が鴻ノ木遺跡の、多気町立相可小学校が新徳寺遺跡の発掘調査を体験した。さらに堀町遺跡では、松阪市教育委員会の依頼による『親子体験発掘』を実施し、16家族約60人が参加している。

4．調査の経過

1．平成2年度

平成2年4月1日付けで三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で業務委託協定が結ばれ、同時に前二者と（社）中部建設協会理事長を交えた三者による業務分担協定も締結した。また、三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で平成2年度の業務委託契約書を取り交わし、範囲確認調査4件（朱中古墳、朱中・鴻ノ木・上ノ垣内遺跡）計622㎡と本調査1件（鴻ノ木遺跡）1,500㎡を行なった。鴻ノ木遺跡については850㎡の下層調査を追加している。

なお、6月には松阪市中万町の県道脇バイパス用地内に仮説プレハブを建設し、『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所』として以後の日常的な調査活動の基地とした。

2．平成3年度

範囲確認調査3件（甘糟・巣護遺跡、明気古窯跡群）計1,352㎡、本調査2件（鴻ノ木・朱中遺跡）5,260㎡を行った。朱中遺跡については、調査中に下層遺構の存在が明らかになり、900㎡の調査を追加することとなった。明気古墳跡群は、計画予定路線と隣接する土地造成地内まで広がっており、建設省紀勢国道工事事務所と開発主体である多気町及び民間開発業者が協議調整してきた経緯があり、埋蔵文化財の取扱いについて、範囲確認調査は先行する事業者側が行うものとなった。それを受けて多気町教育委員会が調査を行った結果、明気7号墳を含め5基の古墳が確認された。その後の協議で造成計画の延期変更は困難であるという先行業者側からの強い要請があり、多気町教育委員会が本調査を行うこととなった。

また、仮設プレハブは遺物整理作業などの日常の業務遂行には狭いなど種々の問題があり、9月に廃止し、同市射和町の鴻ノ木遺跡第2次調査地跡地に、9工区全体の調査で出土する遺物量や、必要人員な

遺跡名	所在地	開催年月日	参加人員
鴻ノ木遺跡第1次	松阪市射和町	平成3年3月16日	60
朱中遺跡	松阪市射和町	平成4年2月1日	100
明気1・2号窯	多気郡多気町相可	平成5年2月13日	150
明気3～5号窯	多気郡多気町相可	平成5年7月31日	150
鴻ノ木遺跡第4次	松阪市射和町		
鴻ノ木遺跡第5次	松阪市中万町	平成5年12月4日	140
上ノ垣外遺跡第1次	多気郡多気町荒蒔		
巣護遺跡	多気郡多気町荒蒔		
上ノ垣外遺跡第2次	多気郡多気町荒蒔	平成6年7月30日	120
新徳寺遺跡第1次	多気郡多気町相可		
堀町遺跡第1次	松阪市朝田町	平成7年2月4日	100
堀町遺跡第2次	松阪市朝田町	平成8年1月20日	120
新徳寺遺跡第2次	多気郡多気町相可	平成8年6月1日	100
堀町遺跡第3次	松阪市朝田町	12月開催予定	

第3表　現地説明会一覧表

どを考慮した規模の新プレハブを建設した。

3．平成4年度

予備調査1件（明気窯跡群磁器探査）4,000㎡、範囲確認調査3件（御堂山・上ノ垣外遺跡、明気窯跡群）計850㎡、本調査2件（鴻ノ木遺跡・明気窯跡群）計5,000㎡を行い、鴻ノ気遺跡については2,321㎡の下層調査を追加している。

4．平成5年度

範囲確認調査2件（新徳寺・堀町遺跡）計452㎡、本調査4件（明気窯跡群・巣護・上ノ垣外・鴻ノ木遺跡）計11,450㎡を行い、上ノ垣外遺跡で112㎡、鴻ノ木遺跡で2,200㎡の下層調査を追加している。また、伐採工事中に大日山2号墳を発見し、協議の結果、平成6年度に調査を実施することとなった。

また、本年度より報告書作成業務を開始し、明気窯跡群、甘糟・巣護遺跡の遺物整理作業を行った。

すでに述べてきたように、計画されたバイパスは9～12工区というように全体が4つの工区に分けられており、全体の具体的計画や用地買収などについて、不確定要素が大きいまま発掘調査に入らねばならなかったことから、建設省との二者協定や（社）中部建設協会を交えた三者協定などについても、中途で見直しや変更が必要となった。つまり、当初の協定では事業の対象を、とりあえず第9工区の現地発掘調査のみに限定してスタートしたため、後の工事計画や用地買収の進展等に伴って新たに発掘調査が必要になった11・12工区については協定を変更せざるを得なくなった。そのため、4月1日付けで建設省との二者協定を変更した。その結果、現地発掘調査は松阪・多気バイパスの全区間を対象に平成9（1997）年度まで実施し、並行して出土遺物の整理・報告書作成を平成5年度から同10（1998）年度まで実施することになった。この協定変更に伴って、建設省・三重県教育委員会・（社）中部建設協会の三者による業務分担に関する協定書の変更、および建設省・（社）中部建設協会の二者による協定変更も同時に行われている。

5．平成6年度

範囲確認調査3件（中野前・廿チ・山ノ花遺跡）計496㎡、本調査6件（大日山古墳群、上ノ垣外・新徳寺・鴻ノ木・朱中・堀町遺跡）計9,450㎡を行い、上ノ垣外遺跡で64㎡、新徳寺遺跡で333㎡の下層調査を追加している。

報告書作成業務は、明気窯跡群、大日山古墳群、甘糟・巣護遺跡を『一般国道松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』として刊行し、上ノ垣外・新徳寺・朱中遺跡、朱中古墳群の遺物整理作業を行った。

6．平成7年度

範囲確認調査2件（栂ノ世古・新徳寺遺跡）計96㎡、本調査3件（山ノ花・廿チ・堀町遺跡）計6,000㎡を行い、廿チ遺跡の調査の際に、古道確認の目的で、北上遺跡のトレンチ調査を行っている。堀町遺跡では、調査区より遺跡が広がることが判明したため、平成8年度に試掘調査を行うこととなった。

報告書作成業務は、上ノ垣外遺跡を『一般国道松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』、朱中遺跡・朱中古墳群を『一般国道松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』として刊行し、中野前・廿チ・北上・御堂山・山ノ花・鴻ノ木遺跡の遺物整理作業を行った。

7．平成8年度

範囲確認調査1件（堀町遺跡）270㎡、本調査3件（栂ノ世古遺跡・新徳寺遺跡・堀町遺跡）計5,250㎡を調査中である。堀町遺跡の範囲確認調査では、新たに3,500㎡の調査が必要となり、予定を変更して平成9年度まで発掘調査を行うこととなった。

報告書作成業務では、新徳寺・栂ノ世古・中野前・廿チ・北上・御堂山・山ノ花遺跡の報告書刊行と鴻ノ木遺跡の遺物整理作業を行っている。

また、第9工区の工事進展に伴い、整理所の移転が必要となった。そこで、第10工区内の松阪市上川町に6月に移転し、平成10年の業務終了まで発掘調査や遺物整理の基地とする予定である。

（田村陽一・森川常厚）

番号		遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	担当者
1	9工区	明気窯跡群（みょうげ）	多気町相可 字明気	平成4（1992）年8月28日～9月30日〈試掘〉 〃 10月18日～平成5（1993）年2月28日 平成5（1993）年4月19日～10月29日 ＊平成4年6月17日～6月25日予備調査（磁気探査）	530 1,500 1,400 計 2,430	田村 陽一・宇河 雅之 田村 陽一・宇河 雅之 宇河 雅之・西村 修久
2		明気古墳群（みょうげ）	多気町相可 字明気		——	多気町教育委員会
3		甘糟遺跡（あまかす）	多気町荒蒔 字甘糟	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試掘〉	144 計 144	田中喜久雄・野原 宏司
4		巣護遺跡（すご）	多気町荒蒔 字巣護	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試掘〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡条里遺構】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原 宏司 西村 修久・東 良樹
5		上ノ垣外遺跡（うえのがいと）	多気町荒蒔字上ノ垣外ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成5（1993）年1月28日～2月1日〈試掘〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 平成6（1994）年4月18日～8月31日	68 96 1,950 ＊112 3,050 ＊64	河瀬 信幸 田村 陽一・宇河 雅之 西村 修久 東 良樹・下平 康弘
		栂ノ世古遺跡（つがのせこ）	多気町相可 字栂ノ世古	平成8（1996）年2月6日 〈試掘〉 平成8（1996）年4月11日～5月10日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【上ノ垣外遺跡3次調査】	48 50 計 5,262 ＊176	田村 陽一・松本 美先 松本 美先・小山 憲一
6		新徳寺遺跡（しんとくじ）	多気町相可 字新徳寺	平成5（1993）年7月9日～7月12日〈試掘〉 平成6（1994）年5月23日～8月24日 平成8（1996）年2月6日 〈試掘〉 平成8（1996）年4月11日～6月27日	96 1,100 ＊333 48 500 ＊114 計 1,744 ＊447	宇河 雅之 小濵 学・西村 修久 田村 陽一・松本 美先 松本 美先・小山 憲一
7		鴻ノ木遺跡（こうのき）	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成2（1990）年10月11日～平成3（1991）年3月19日 平成3（1991）年4月23日～5月31日 平成4（1992）年5月11日～8月31日 平成5（1993）年4月19日～8月29日 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年3月31日 平成6（1994）年8月23日～平成7（1995）年1月25日	272 1,500 ＊850 460 3,500 ＊2,321 3,600 ＊400 2,200 ＊1,800 1,300 計12,832 ＊5,371	河瀬 信幸 河瀬 信幸・小林 秀 田中喜久雄・野原 宏司 宇河 雅之・田村 陽一 東 良樹・小濵 学 小濵 学・田村 陽一 下平 康弘
8		朱中遺跡（しゅなか）	松阪市射和町 字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成3（1991）年6月1日～8月24日 平成3（1991）年10月14日～平成4（1992）年3月13日 平成6（1994）年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500 ＊900 400 計 5,384 ＊900	河瀬 信幸 田中喜久雄・野原 宏司 田中喜久雄・野原 宏司 東 良樹
9		朱中古墳（しゅなか）	松阪市射和町 字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成5（1993）年6月25日～8月20日	98 1,000 計 1,098	河瀬 信幸 西村 修久
10	11工区	中野前遺跡（なかのまえ）	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6（1994）年9月26日～10月5日〈試掘〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【石津遺跡】	176	東 良樹
11		廿チ遺跡（はたち）	松阪市上川町字廿チほか	平成6（1994）年10月6日～10月14日〈試掘〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【東牛込遺跡】	144	東 良樹
		北上遺跡（きたかみ）	松阪市上川町 字北上	平成7（1995）年6月7日～7月19日 〈範囲確認〉	1,600 計 1,744	下平 康弘・小林 秀
12	12工区	堀町遺跡（ほりまち）	松阪市朝田町字堀町・斎宮ほか	平成5（1993）年7月19日～7月23日〈試掘〉 平成6（1994）年8月26日～平成7（1995）年2月20日 平成7（1995）年8月7日～平成8（1996）年1月24日 平成8（1993）年7月15日・8月19日～21日〈試掘〉 平成8（1996）年7月15日～平成9（1997）年 月 日 平成9年度調査予定	356 3,000 3,100 270 4,700 3,500 計14,926	宇河 雅之 小濵 学 小濵 学・松本 美先 小濵 学・兼古 愼 小濵 学・兼古 愼
13		御堂山遺跡（みどうやま）	松阪市西野々町 字御堂山	平成5（1993）年1月26日～1月27日〈試掘〉	224	宇河 雅之
14		山ノ花遺跡（やまのはな）	松阪市古井町 字山ノ花	平成6（1994）年10月17日～10月20日〈試掘〉 平成7（1995）年5月10日～5月26日	176 1,300 計 1,476	東 良樹 松本 美先・西村 修久
15	9工区	大日山古墳群（だいにちやま）	多気町荒蒔 字大日山	平成6（1994）年4月7日～6月10日	600	西村 修久・小濵 学

第4表　発掘調査遺跡一覧

II. 位置と環境

櫛田川は紀伊山地に源を発し、中央構造線に沿って東流するが、松阪市南部の丘陵地帯から平野に出るあたりで北方に向きを変え、伊勢湾に注ぐ総延長約84kmの三重県を代表する大河川である。この屈曲点から分流し、本流の東側を北流する祓川が本来の河道とされるが、乱流を繰り返し、11世紀後半の大洪水により現流路に移行したものと考えられている。この乱流の結果、松阪市東部には広大な沖積平野が形成され、豊かな水田地帯となっている。

この沖積平野を望む低位丘陵には、弥生から古墳時代にかけての有力な遺跡が存在する。草山遺跡（5）は発掘調査の結果、竪穴住居や方形周溝墓が多数検出され[1]、弥生時代後期の大集落であることが判明した。古地図により直径55mの周溝を伴う円墳であったことがわかる茶臼山古墳（7）、それと同様な規模で残存する久保古墳（4）は、4世紀後半頃の築造と考えられる大型墳である。前者からは内行花文鏡、後者から三角縁神獣鏡のいずれも舶載鏡の出土が伝えられている[2]。5世紀代の築造では、全長95mを測り、伊勢国最大の前方後円墳である宝塚1号墳（1）、全長72mの造出し付き円墳の2号墳（2）があり、強大な権力者の存在を明示している。

遺跡は沖積平野にも広がり、弥生時代中期の涌早崎遺跡（6）、後期の堀町遺跡（12）の両者から、近年の発掘調査で銅鐸形土製品が出土した[3]。銅鐸を模倣した遺物としては、前述した草山遺跡からも銅鐸形銅製品が出土している[4]。西山遺跡（15）では、古墳時代後期の竪穴住居が検出され[5]、全長45mの前方後円墳に推定される大塚山古墳を中心とする佐久米古墳群（8）は、出土遺物から5世紀後半に築造されたものと考えられる[6]。このように、河川の氾濫が相継いだと思われる沖積平野にも、弥生時代以来人々は拠点を構えていたようである。

山ノ花遺跡（14）、御堂山（13）、廿チ遺跡（11）、北上遺跡（9）は、いずれも沖積平野に、中野前遺跡（10）は低位丘陵から緩やかに傾斜する扇状地の先端部に位置している。これらの遺跡の周囲は、「和名抄」に記載のある飯野郡黒部郷、長田郷、神戸郷に比定されている。古代官道は、現在の駅部田町(3) から早馬瀬町（18）へまっすぐ延びていた[7]と推定されており、両町の名は、それに関連するものと考えられる。都と斎宮・伊勢神宮、あるいは志摩方面を結ぶ交通路で、斎王群行等、盛んな往来があったものと思われる。

伊勢神宮の勢力は、中世にはいっても無視できず、西黒部町には黒部御厨が設置された。しかし、北畠氏が徐々に支配を強化し戦国大名化するにつれて、神宮の力は後退する。西黒部町周辺は、中世後期には北畠氏の支配下にあり、塩業を行っていたことが古文書に記されている[8]。そしてそれを裏付けるかのように、同町の池ノ上遺跡（16）、小狐遺跡（17）からは、周囲に粘土を貼りつけたかん水槽をはじめとする製塩遺構が検出されている[9]。

その北畠氏も織田氏に支配され、蒲生氏郷により松坂城（19）やそれに伴う城下町が建設され、三井家をはじめとする松坂商人が活躍することになる。そしてこの伝統は現在に受け継がれ、松阪市は人口10万人をこえる商都として繁栄しているのである。

（森川常厚）

〔註〕

1．松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』昭和57年7月25日～昭和60年3月20日
2．西山克・久松倫生・下村登良男「松阪市」『日本歴史地名大系24　三重の地名』平凡社　1983
3．福田昭『涌早崎遺跡発掘調査報告』松阪市教育委員会　平成4年3月
4．前掲①に同じ
5．三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報4』1993.3
6．前掲②に同じ
7．足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道第1巻』1988
8．前掲②に同じ
9．前掲⑤に同じ

第２図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院・松阪港・松阪　1:25,000）

Ⅲ．山ノ花遺跡

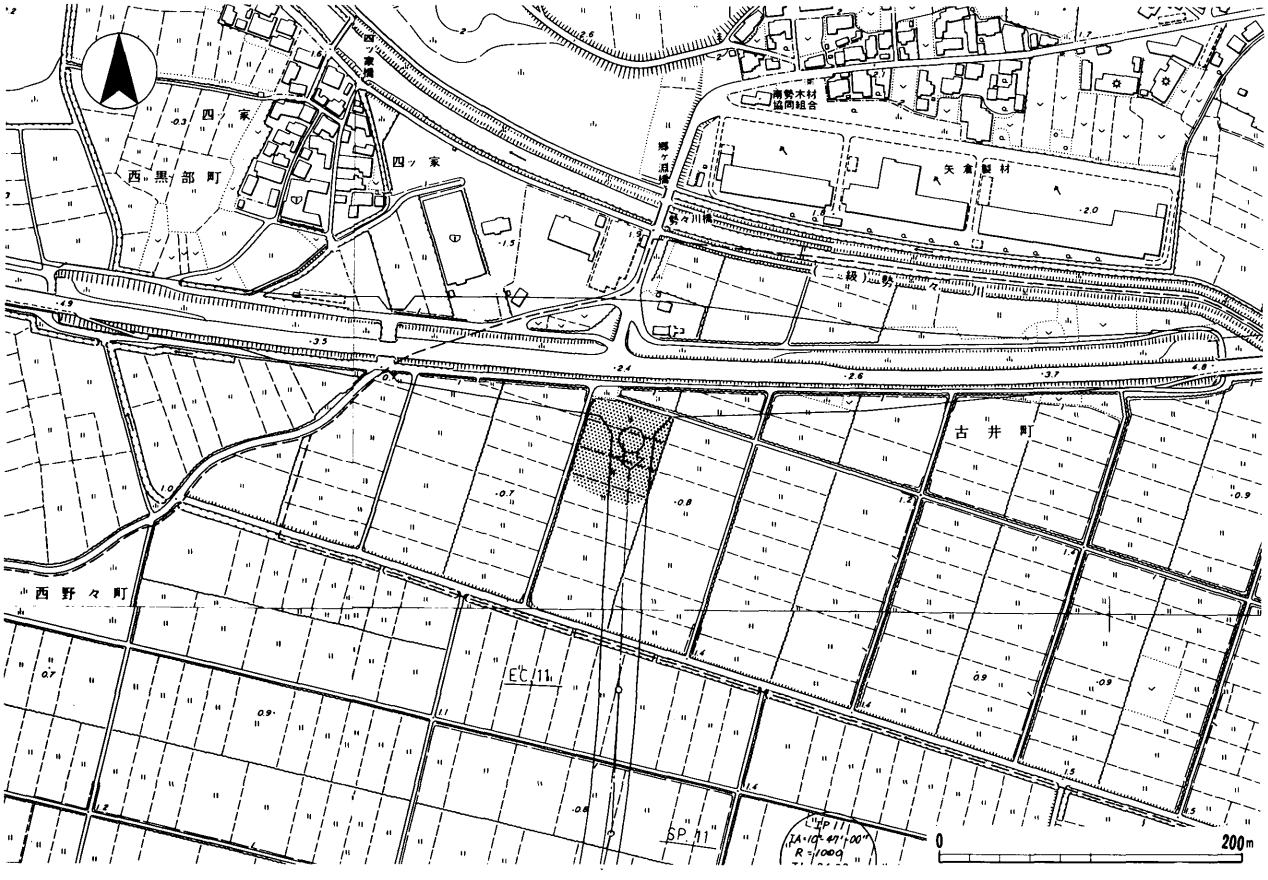
山ノ花遺跡は松阪市街の中心から北東部へ約3.5km離れたところの松阪市古井町字山ノ花にある。調査は５月８日～５月25日まで実施し、調査面積は1,300m²であった。現況は水田地帯となっている。

今回の調査地は北に勢々川（下流で金剛川に合流）が東西に流れ、西に金剛川が南北に流れ伊勢湾へと注いでいる三角洲と後背低地との境目にあたる所にある。このあたりは南勢平野の松阪低地と呼ばれる場所である[1]。ここから約2.5kmほど北には伊勢湾があり、海抜0.7～0.8mの位置である。この遺跡の北東約0.7kmほどには西山遺跡（旧称：西黒部遺跡）、南西約１kmには佐久目古墳群（大塚山・丸山・糠塚古墳）があり、南西約1,3kmには朝田寺が存在する環境である。表土を除去した調査区内の地山の高低差としては、西北に向かい緩やかに低くなっている。

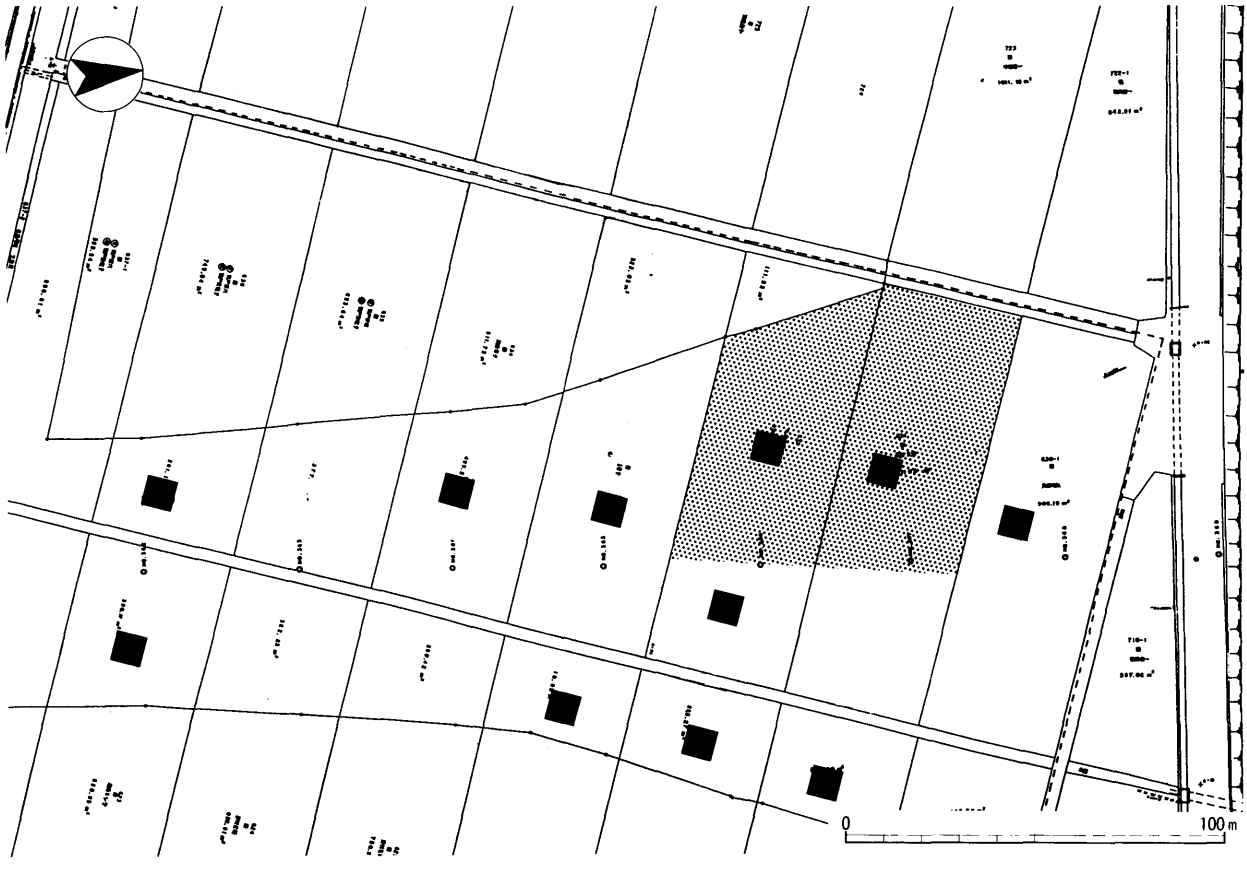
１．層　　序

今回調査を行ったところは、三角州と後背低地の間ということもあり、砂礫で構成された層が基本的なものと確認された。

調査区の基本的層序は、西壁では上から第１層：暗褐色土（耕作土）、第２層：暗灰粘質土（床土）、第３層：暗灰褐砂礫土、第４層：暗灰砂、第５層：淡褐混じりの暗灰砂である。南壁は第１層：暗褐色土（耕作土）、第２層：暗灰褐砂礫土、第３層：淡黒灰砂、第４層：暗黒灰砂となるが、この南壁の西寄り1/3の所からは第２層：暗灰砂、第３層：淡黒灰砂、第４層：暗黒灰砂となっている。



第３図　遺跡地形図（１：50,000）



第４図　調査区位置図（１：2,000）

２．調査の成果

道路建設用地内の水田を調査し、土坑３基、溝２条、ピット等を検出した。

遺物は、コンテナバット（54×34×15cm）に６箱程度出土したが、ほとんどが小片であり中世から近世にかけての遺構に伴わないものである。遺物については実測可能な物のみ記述することとした。

以下、検出した遺構、遺物について述べる。

１．遺構

Ａ．土坑

ＳＫ２は3×3mの隅丸方形で、深さは検出面から10cmほどである。ＳＫ２より西８ｍにＳＫ３がある。ＳＫ３は不定形をしている。深さはこれも10cmほどである。これらの土坑の埋土は暗褐灰砂土である。２つの土坑は溝（ＳＤ１）によって連続したものとして検出された。ＳＫ５は直径２ｍ・深さ60cmのものである。埋土は暗黒灰砂土であり、遺物は陶器片が出土した。

Ｂ．溝

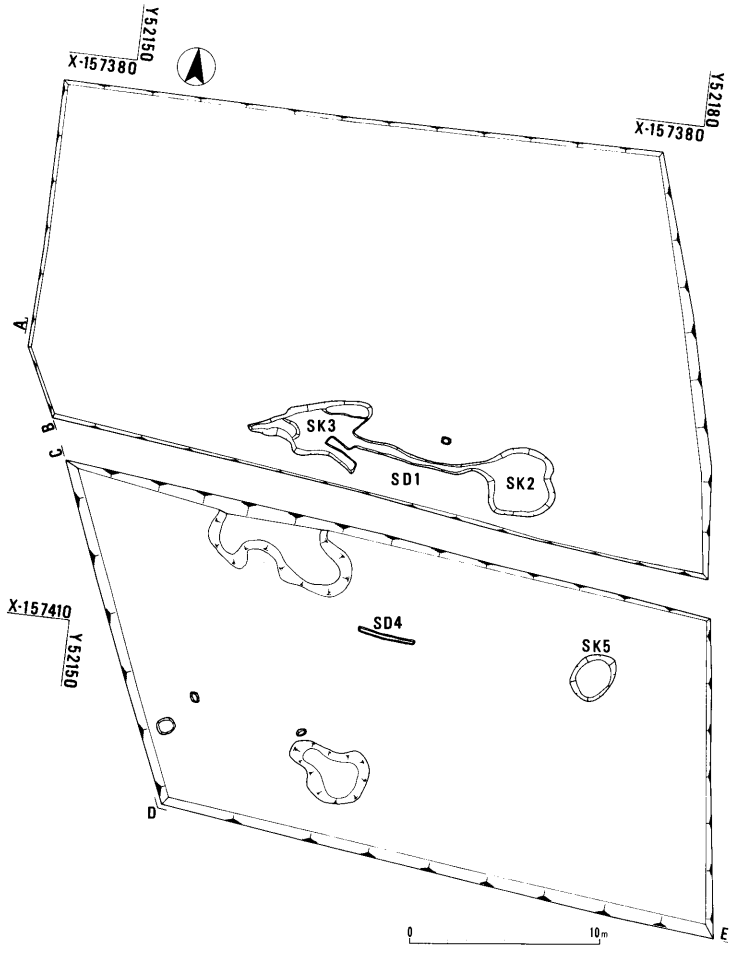
ＳＤ１は、ＳＫ２とＳＫ３の間にこれら２つの土坑を繋ぐように検出された。ＳＫ２の西側から数cmの高低差をもってＳＫ３の東側へと流れ込む様な形である。幅50cm、深さ５～６cmで、埋土は暗褐灰砂土である。ＳＤ４は幅0.3m、長さ3m、深さ10cmである。埋土は淡黒粘質砂土である。遺物は出土しなかった。

Ｃ．ピット

ピット６は0.5×0.6mの楕円形で深さは10cm、埋土は暗褐砂土である。この中から、土師器の小片が出土した。他のピットについては遺物もなく、建物としてのまとまりにはいたらなかった。

２．遺物

今回の調査によって出土した遺物はコンテナ箱で６箱程度の少量であった。大半が土器類で、ほとんどが遺構に伴わない細片ばかりであった。実測が可



第５図　遺構平面図（１：400）

能な遺物についてのみ記述することとする。

Ａ．土師器

土師器では皿・鍋・羽釜・ホウロクがある。皿（１）は口縁部をやや内彎させたもので、浅い体部にユビオサエのあるものがある。鍋（４）の口縁部は外反が大きくなっており、口縁端部には折り返しがある。体部外面にはハケ目がある。また、茶釜形の土師器（５）もある。羽釜（10・11）は鍔の張りが水平よりやや上向きに張り付けられている。口縁部は外側に折り返されている。調整は体部内面はナデが基調でユビオサエ痕のあるものもある。ホウロクは胎土が緻密で焼成が良好である。口縁部は水平近くまで外反し、その端部には内側への折り返しがみられる。

Ｂ．陶器・磁器

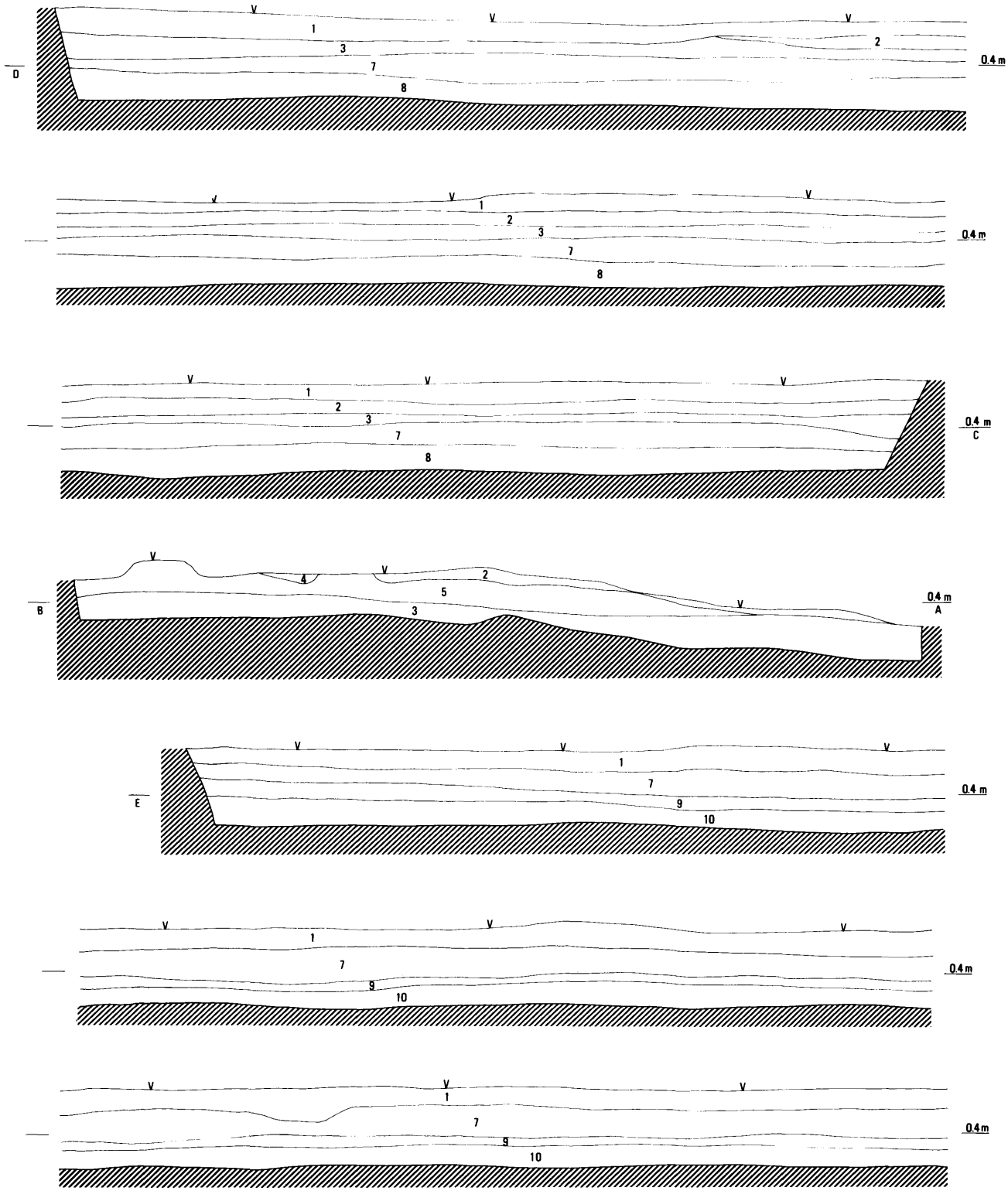
陶器には皿・椀・鉢・甕があり、無釉と施釉がある。無釉は山茶椀（14・18）、甕（12）、ネリ鉢（13）があり、他は施釉である。施釉の皿には、灯明皿（23）・縁釉小皿（24）・内禿小皿（25）、直縁か折り縁の大皿がある。灯明皿は17世紀頃の美濃焼、縁釉小皿は古瀬戸と思われる。椀には輪禿椀（21）、平椀（22）がある。磁器には皿（28）・椀（26・27）があり、緑系の釉のものと染付けがある。皿は染め付けで内側に風景画が施されている。輸入物のようである。椀には連弁文を外側に施した青磁もある。

Ｃ．土錘

出土した３点の中で２点（30・31）は完形で、残り１点（29）も片側の端部が少し欠けているだけであった。全体的に大雑把な作りである。

Ｄ．加工円盤

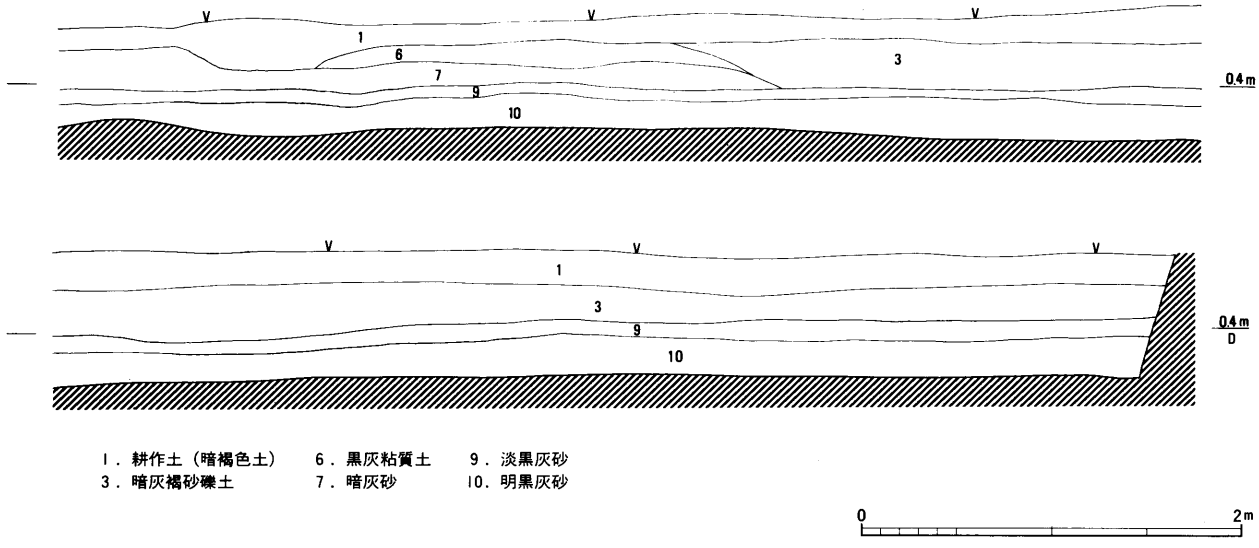
直径2.8cm厚さ1.3cmの土師器の加工円盤（32）１点がある。



1．耕作土（暗褐色土）
2．床土（暗灰粘質土）
3．暗灰褐砂礫土
4．淡黒粘質土
5．明灰粘質土（褐斑点、砂礫混）
6．黒灰粘質土
7．暗灰砂
8．暗灰砂（淡褐混り）
9．淡黒灰砂
10．明黒灰砂

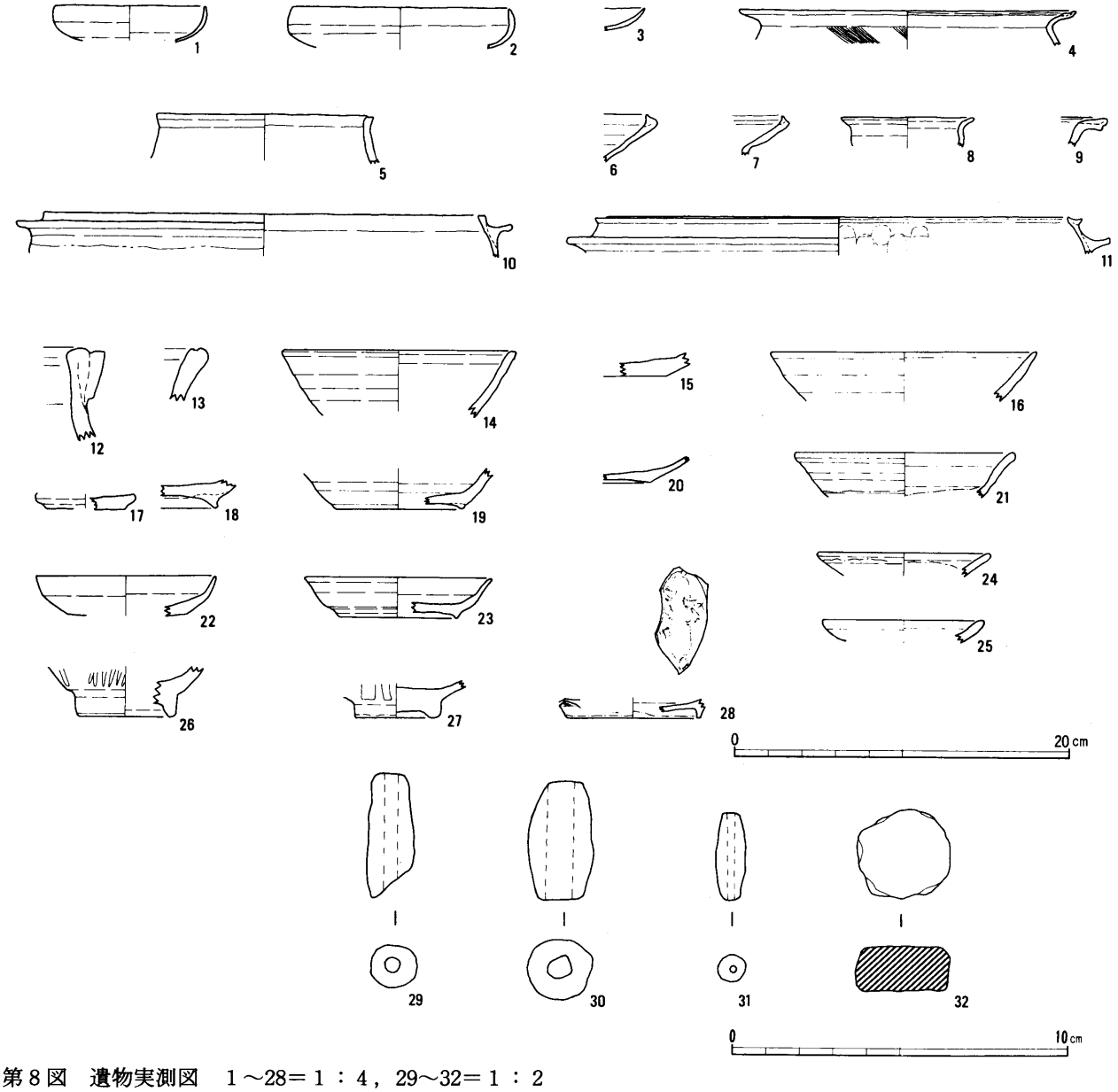
0　2m

第6図　土層断面図－①（1：40）



1．耕作土（暗褐色土）　6．黒灰粘質土　9．淡黒灰砂
3．暗灰褐砂礫土　7．暗灰砂　10．明黒灰砂

第７図　土層断面図ー②（１：40）



第８図　遺物実測図　１～28＝１：４，29～32＝１：２

3．結　　語

今回の調査では、遺跡の性格を表すような顕著な遺構は検出できなかった。ただ、出土した遺物から想定できることは、中世（鎌倉期）～近世（江戸期）にかけての遺跡であるということである。検出された遺構が少数であったのは、明治の頃にこの地域で土地改良が成されているということと無関係でないかもしれない。山ノ花遺跡もこの時に何らかの土地改良の影響を受けていると思われる。しかし、今のところ同時代の遺跡はこの付近では確認されていない。山ノ花遺跡は古井町周辺の中世～近世の時代を考える上で貴重な手がかりの一つになるものと思われる。

（松本美先）

［註］

① 『松阪市史　史料編１巻　自然』松阪市史編纂委員会 1978年

No.	種類	器種	出土位置	法量			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	整理番号
				口径	底径	器高							
1	土師器	皿	包含層	(9.0)			外：ヨコナデ 内：　〃	並	良	外：灰白 内：浅黄橙	口縁部1/8		4-1
2	〃	〃	〃	(13.5)			外：ヨコナデ 内：　〃	密	〃	外：灰白 内：〃	口縁部1/10		1-5
3	〃	〃	〃				外：ヨコナデ 内：　〃	〃	〃	外：灰白 内：にぶい黄橙	口縁部1/20		1-8
4	〃	鍋	〃	(20.2)			外：）ヨコナデ後 内：）体部ハケ目	〃	やや軟	外：浅黄橙 内：　〃	口縁部1/10		2-2
5	〃	茶釜	〃	(13.0)			外：ヨコナデ 内：　〃	並	〃	外：灰白 内：〃	口縁部1/6		2-3
6	〃	鍋	〃				外：ヨコナデ 内：　〃	〃	良	外：灰白 内：にぶい黄橙	口縁部1/20	外側にススス	4-6
7	〃	〃	〃				外：ヨコナデ 内：　〃	密	〃	外：赤灰 内：にぶい黄橙	口縁部1/20	外側にススス	2-1
8	〃	〃	〃	(8.0)			外：ヨコナデ 内：　〃	並	〃	外：灰白 内：〃	口縁部1/10	ミニチュア鍋	4-3
9	〃	〃	〃				外：ヨコナデ 内：　〃	〃	〃	外：全面にスス 内：にぶい黄橙	口縁部1/15	外側にススス	6-1
10	〃	羽釜	〃	(26.2)			外：ヨコナデ 内：　〃	〃	〃	外：明褐灰 内：〃	口縁部1/10	外側にススス	4-5
11	〃	〃	〃	(27.3)			外：ヨコナデ 内：ユビオサエ後ナデ	〃	〃	外：灰白 内：灰白	口縁部1/10		2-5
12	陶器	甕	〃				外：回転ナデ 内：　〃	密 ～2㎜長石	〃	外：にぶい赤橙 内：灰赤	口縁部1/10	口縁帯ハリ付 常滑	3-3
13	〃	ネリ鉢 （片口鉢）	〃				外：回転ナデ 内：　〃	密	〃	外：灰白 内：〃	口縁部1/20	尾張Ⅵ形式に並行	3-2

第５―１表　遺物観察表

No.	種類	器種	出土位置	法量			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	整理番号
				口径	底径	器高							
14	無釉陶器	山茶碗	包含層	(14.0)			外：回転ナデ 内：　〃	密	良	外：灰白 内：〃	口縁部1/10		2-4
15	施釉陶器	大皿	〃				外：回転ナデ 内：　〃	〃	〃	外：灰白 内：〃	底部1/10	直縁か折り縁の大皿	7-3
16	〃	椀	〃	(16.0)			外：回転ナデ 内：　〃	〃	〃	釉：浅黄 器：灰白	口縁部1/10	平碗(15世紀前)	7-2
17	土師器		〃				外：ヨコナデ 内：　〃	粗 ～3㎜砂粒	〃	外：灰白 内：〃	高台部1/3		4-4
18	無釉陶器	山茶碗	〃		(8.0)		外：回転ナデ 内：　〃	密	〃	外：灰白 内：〃	高台部1/20	高台にモミ殻痕 尾張Ⅴ形式	3-1
19	〃	〃	〃		(7.6)		外：回転ナデ 内：　〃	〃	〃	外：灰白 内：〃	高台部1/6	高台にモミ殻痕、 ハリ付ケ台 尾張Ⅵ形式	5-3
20	施釉陶器	皿	〃				外：回転ナデ後釉 内：　〃	〃	〃	釉：浅黄 器：灰黄	高台部1/10	外側にスス 近世江戸時代 （信楽）	7-4
21	〃	椀	〃	(13.2)			外：回転ナデ後釉 内：　〃	〃	〃	釉：浅黄 器：灰白	口縁部1/10	輪禿17世紀後 登り窯（Ⅳ～Ⅴ形式）	3-5
22	〃	〃	SK1	(10.8)	(4.6)	2.4	外：回転ナデ後釉 内：　〃	〃	堅微	外：灰白 内：〃	口縁部1/6		1-3
23	〃	皿	包含層	(11.2)	(6.9)	2.4	外：回転ナデ後釉 内：　〃	〃	良	釉：灰白、 一部明黄褐 器：明灰白	口縁部1/5	内側にスス、ケズリ出し高台 灯明皿(17世紀初、美濃)	1-4
24	〃	〃	〃	(10.4)			外：回転ナデ後釉 内：　〃	〃	〃	外：灰白 内：鉄釉（黒）	口縁部1/10	縁釉小皿 古瀬戸（あな窯）	3-4
25	〃	〃	〃	(7.8)			外：回転ナデ連弁文後釉 内：　〃　後釉	〃	〃	釉：浅黄 器：灰オリーブ	口縁部1/20	内禿（大窯？）	7-1
26	磁器	椀	〃		(6.0)		外：回転ナデ連弁文後釉 内：　〃　後釉	〃	〃	釉：明緑灰 器：灰白	高台部1/5	青磁 連弁文	4-2
27	〃	〃	〃		(5.2)		外：回転ナデ後釉 内：　〃	〃	〃	釉：オリーブ黄 器：灰白	高台部1/6	青磁物?	5-2
28	〃	皿	〃	(7.8)			外：回転ナデ後染め付け 内：　〃	〃	〃	染め付け 器：灰白	口縁部1/4	明代？	5-1
29	〃	土錘	〃				外：ナデ	〃	〃	外：灰白	ほぼ完形	外　径〔1.2〕 内孔径〔0.4〕	1-7
30	土師器	〃	〃				外：ナデ	やや粗 ～1㎜砂粒	〃	外：灰白	完形	外　径〔2.0〕 内孔径〔0.6〕	1-1
31	〃	〃	〃				外：ナデ	〃	〃	外：灰白	完形	外　径〔0.8〕 内孔径〔0.2〕	1-2
32	〃	加工円盤	表採				外：ナデ	密	〃	外：浅黄橙	完形	外　径(28.0) 厚　さ(13.0)	1-6

第5―2表　遺物観察表

Ⅳ．廿チ・北上遺跡

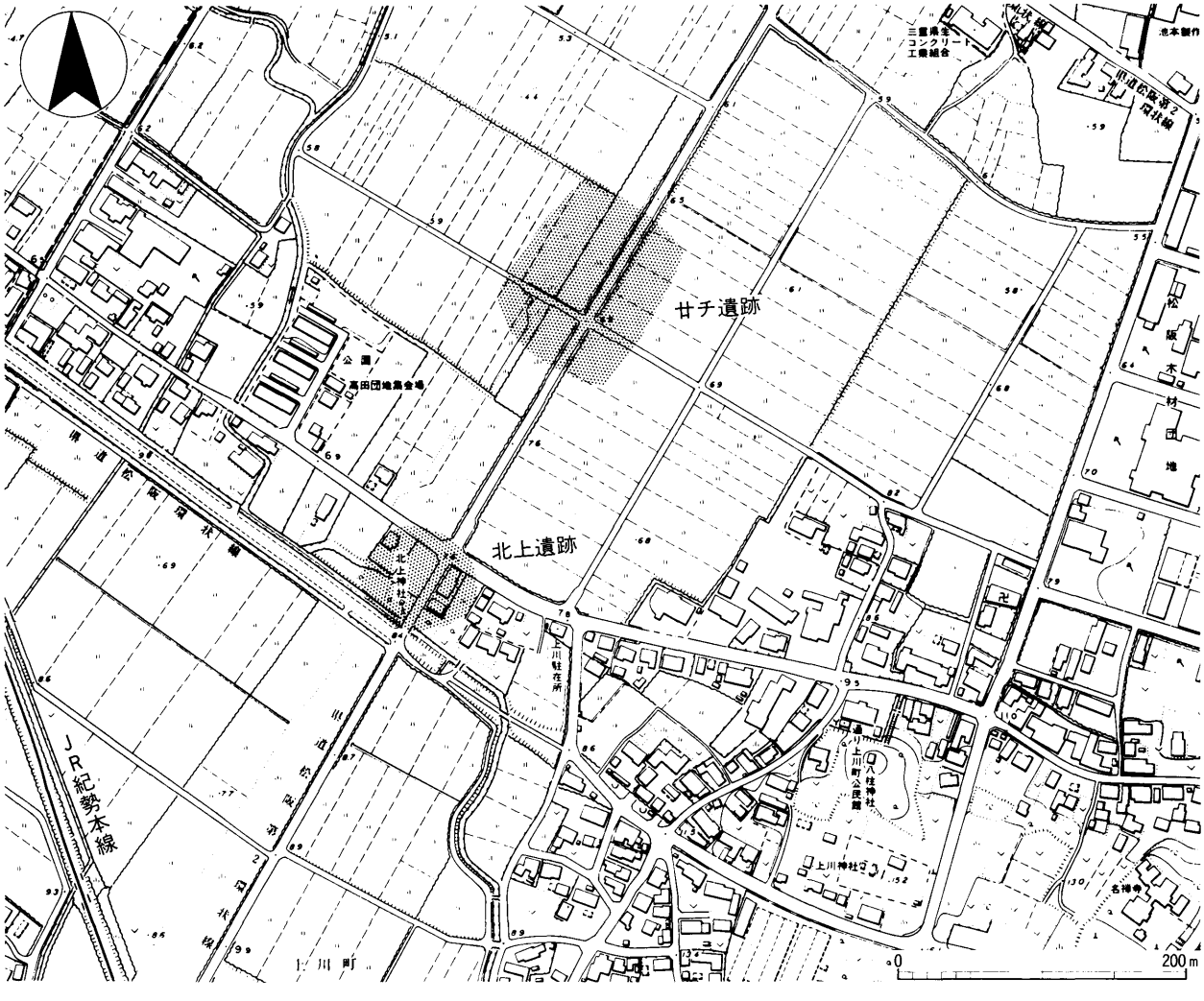
1．廿チ遺跡

廿チ遺跡は、松阪市上川町をほぼ南北に走る、県道松阪第２環状線の西側の水田地帯に位置している。

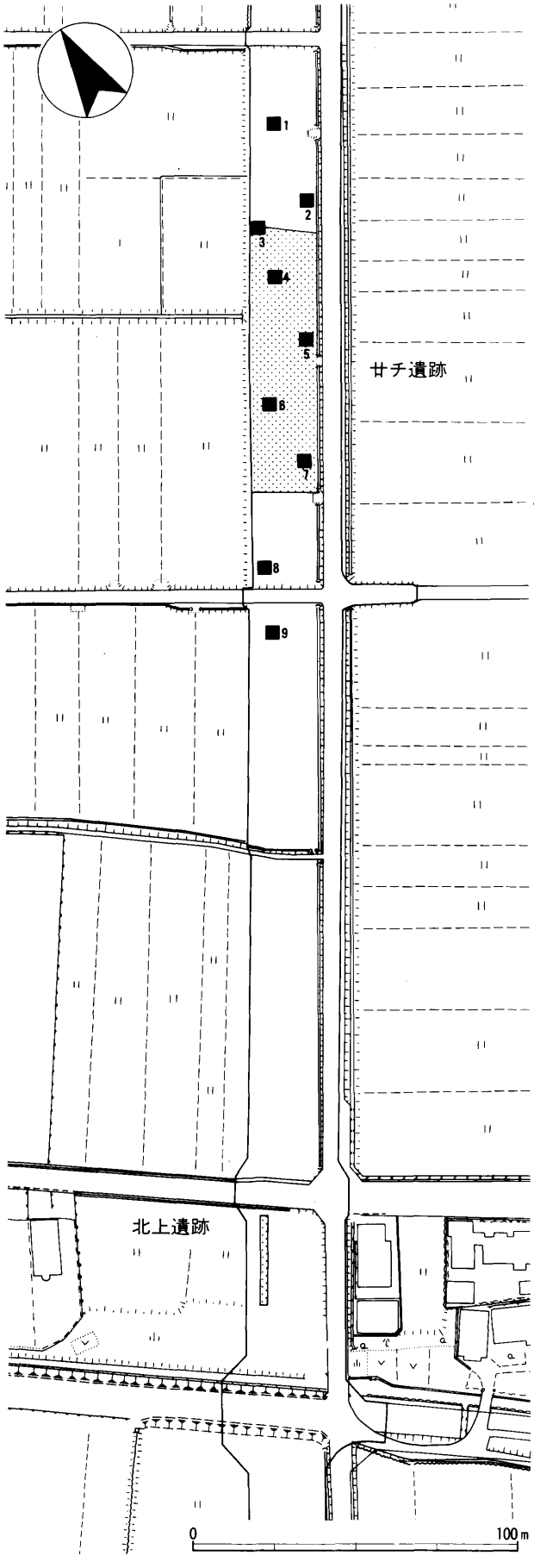
1．調査の成果

廿チ遺跡の周辺は、最近まで、古代条里制に基づくとみられる方格地割が整然と残されていたところである。また、方格地割の方向などから、旧飯高郡と飯野郡の、ちょうど境界線あたりに位置するものと考えられている。さらに、「廿チ」と言う坪並の遺称とも判断できる小字名からも、古代条里制に関わる遺構などの検出されることが期待された。しかし、周辺は10年ほど前にほ場整備事業の工事が行われており、すでにかなり破壊されていたため、十分な成果を得ることができなかった。

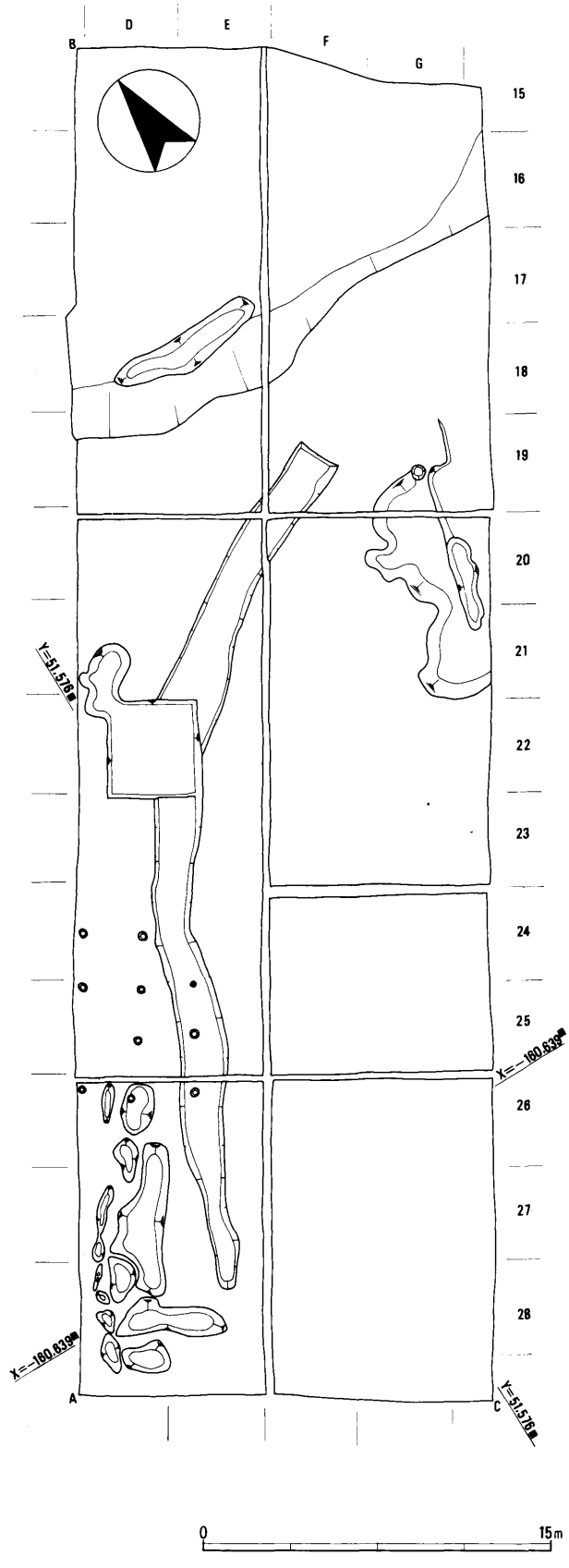
主な遺構としては、溝を１条検出することができた。溝はほぼ南北方向で、やや東に湾曲し、北端は方形に、南端は不定形に切れている。断面形は、幅広の平底である。現状での深さは、検出面から深い



第９図　遺跡地形図（１：5,000）



第10図　調査区位置図（1：2,000）



第11図　廿チ遺跡遺構平面図（1：300）

ところで10cm程度と、残りが非常に悪かった。さらに遺物も、器種不明の土師器の小片がわずかに出土した程度であった。このため、溝の年代や性格についてはわからなかった。

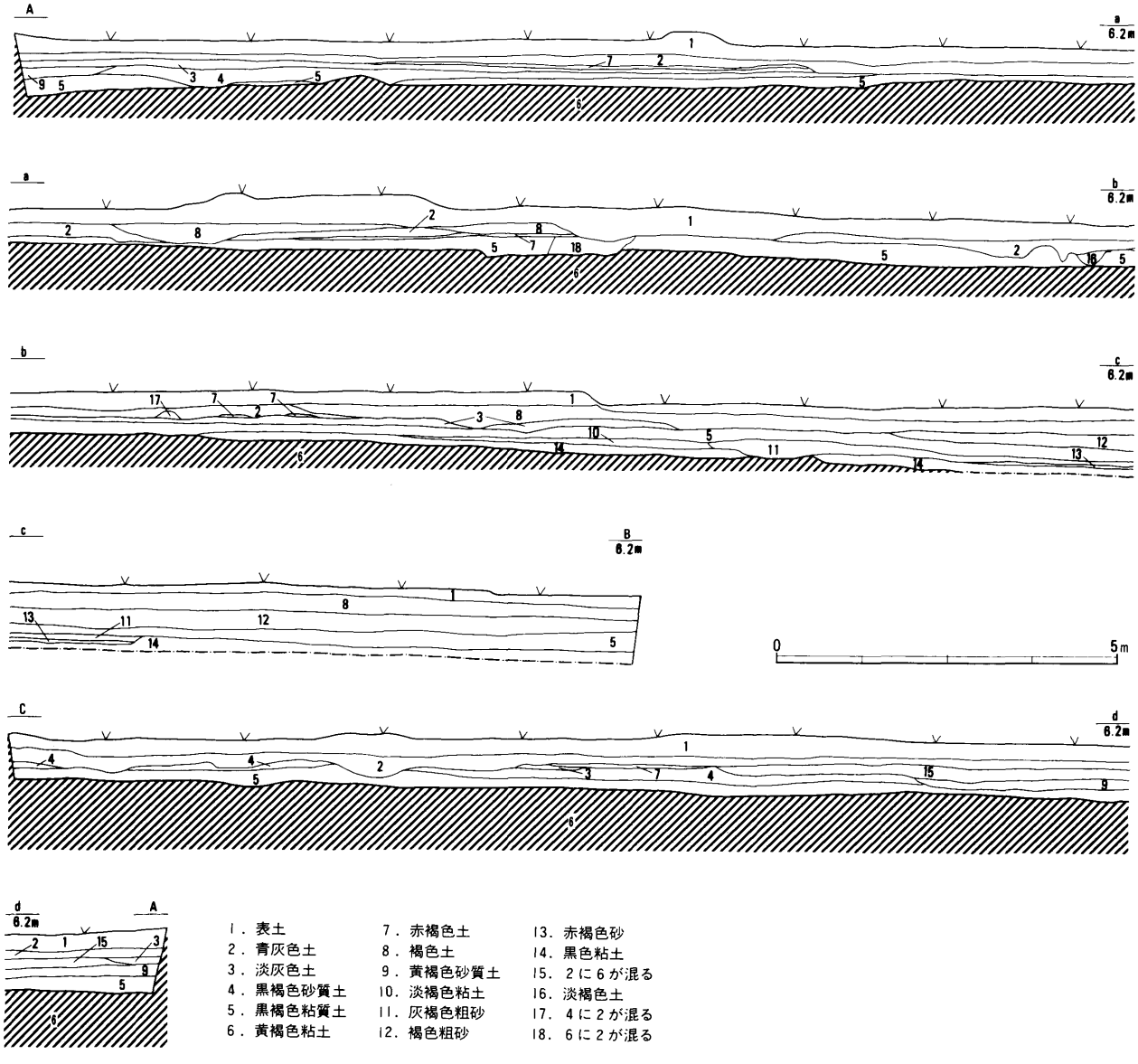
次に小穴であるが、一見掘立柱建物のように、部分的に並んで検出された。これについても埋土などの状況からみて、ほ場整備工事以降のものである可能性が高く、掘立柱建物の跡とするには疑問が残る。また調査区の南西隅に集中している不定形の土坑は、最近の土取りの跡である。

調査区の北側では、基盤層が急激に落ち込んでいる。黒灰色や暗青灰色の粘質土と粗砂が交互に堆積している状況から、流れの緩い河道ないしは沼か池だったと考えられる。落ち込みからは、遺物は出土しなかった。

遺物は、須恵器から現代陶磁器に至るまで、整理箱に換算して5箱ほどが出土した。しかし、いずれも磨耗した小片であること、および工事の際の客土からの出土であることなどから、当遺跡との関係は薄いものと判断される。

2．小結

今回の調査では、当初の予想に反して十分な結果を得ることができなかった。ただ、用途・性格は不明ながら溝の検出されていることから判断して、工事によって削平される以前の段階においては、さらに多くの遺構のあった可能性は否定できない。



第12図　廿チ遺跡土層断面図（1：100）

2．北上遺跡

松阪市上川町に位置する事業地内、ちょうど旧参宮街道が屈曲する付近において、幅約２ｍ、長さ約28ｍのトレンチを設定して調査を実施した。

旧飯野郡内の参宮街道は、条里制に伴うと考えられる方格地割の方向に一致しており、かつ古代の官道と重複していると推定されている。その延長が事業地内を横断することから、調査は、主に古代官道の発見を目的として行うことになった。結果的には古代官道を発見することはできなかったが、古墳時代後期の遺物を多く含んだ旧河道を検出することができた。

１．遺構

検出されたのは河道の右岸と見られ、今も付近を流れる真盛川の旧河道ではないかと考えられる。

河道の埋土は、大きく２層に分けることができる。上層は暗褐色から淡褐色の砂質土で、下層は灰青色砂質土である。この内遺物は上層に多く含まれており、また岸付近に集中して出土する傾向があった。さらに、上層には部分的に粗砂の混入がいくつかあり、何度も増水したことを示している。

２．遺物

土師器は、椀（１～４）・甕（７～13）のほか、完形の小型の壺（５）、壺の脚（６）、把手付鍋（14）などが出土している。椀は、丸味をおびた単純な器形が主であるが、（４）のみは口縁内面に強いヨコナデを施して屈曲させており、時代は若干先行するものと見られる。（３）と（４）の外面には、ハケメ調整の痕跡がある。

甕については、（７）が口縁を直線的に立ち上がらせ、端部のみ小さく外反させている点でやや異質である。また内面の調整も、下半を板状工具によるナデを施しているもののハケメは見られない。また（９）の内面にもハケメはない。

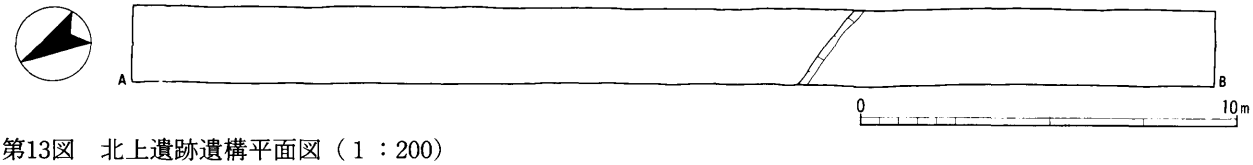
須恵器は、まず６世紀末から７世紀初め頃の杯（18～22）や蓋（15～17）がある。外面底部付近を回転のヘラケズリで調整した短頸の広口壺（23）も、ほぼ同時期のものであろう。

この他注目される遺物として、刀形と見られる木製品（25）がある。これは厚さ約３㎜、幅約２㎝、長さ約38㎝ほどの板材を加工して鋩をつくり、刃部側には抉り込みを入れて柄部を表現している。また、笏状の用途不明木製品（24）も出土している。

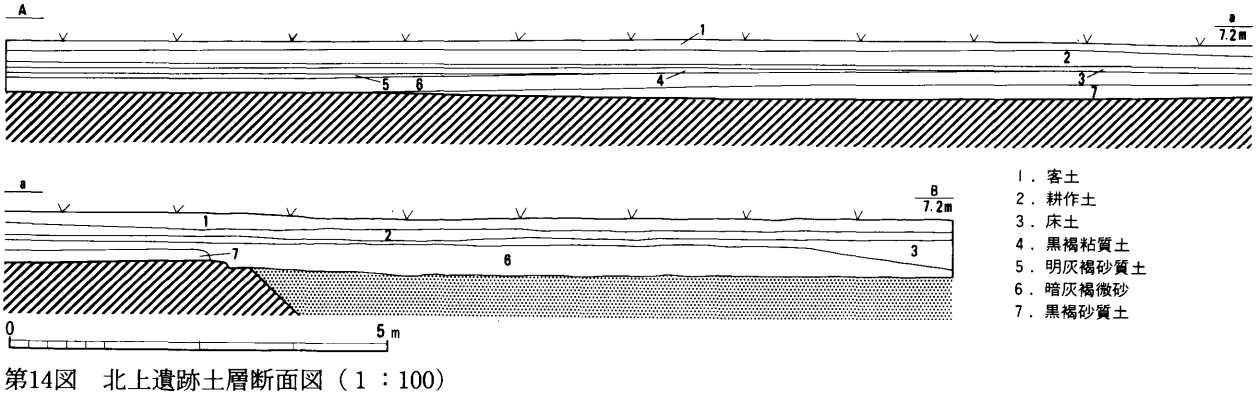
３．小結

古代官道の発見、ないしは確認と言う当初の目的は達成できなかったが、いくつか示唆に富む成果を得ることができた。

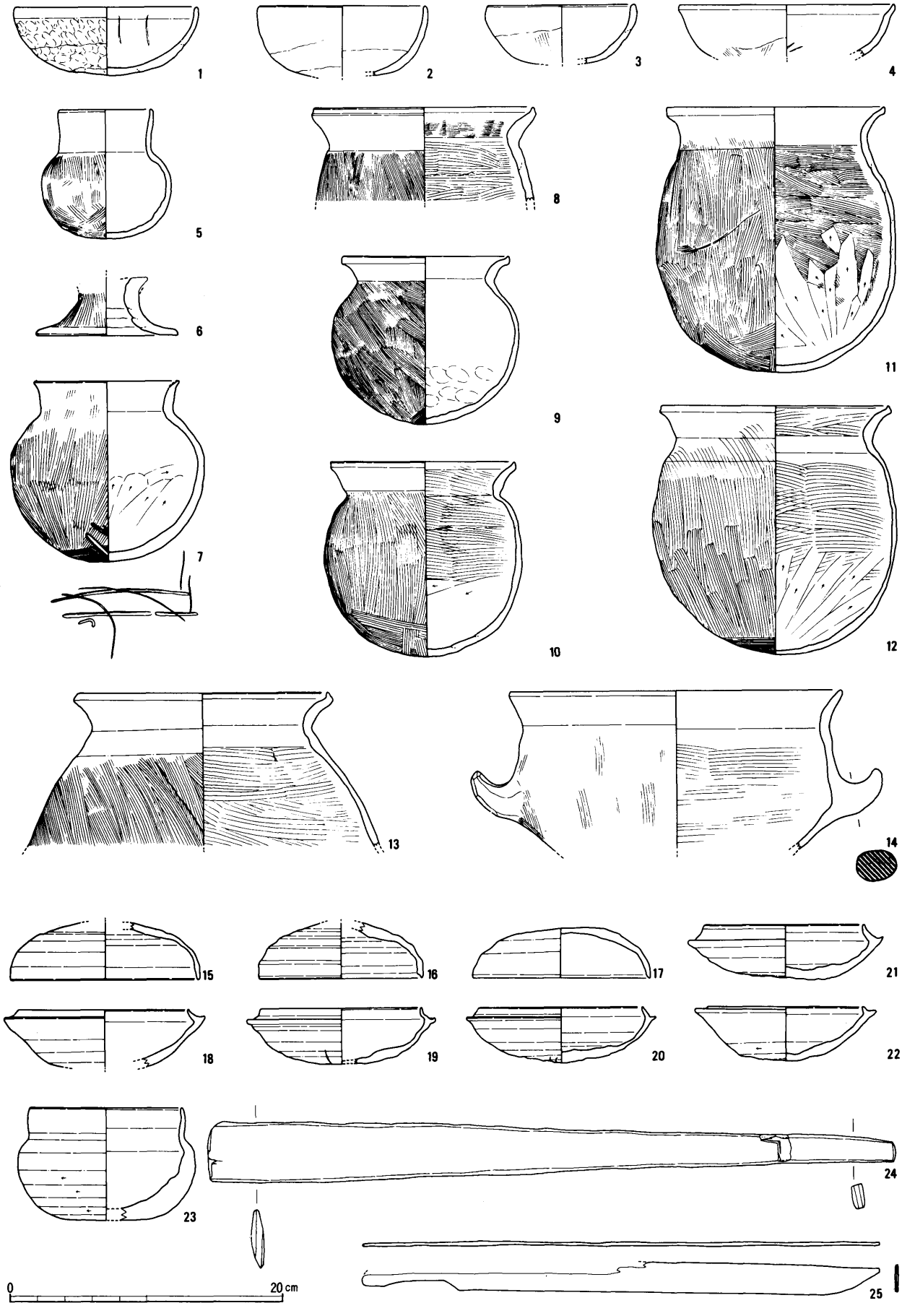
まず一つは、検出されたのが真盛川の旧河道と考



第13図　北上遺跡遺構平面図（１：200）



第14図　北上遺跡土層断面図（１：100）



第15図　北上遺跡遺物実測図（１：４）

えられることである。調査地点は、条里制に伴うと考えられる地割の変化から判断して、飯高郡と飯野郡の境にほぼ位置しており、かつての真盛川が郡境であった可能性を強く示唆している。

次に注目されるのは、出土した遺物の性格と出土状況である。調査が非常に狭い範囲に限られていた点で問題もあるが、完形の土師器小型壺や刀形木製品の出土は、祭祀儀礼の可能性を示している。また、土師器類に破損の少ないことは、儀礼か付近で行われていたことをも示していると言えよう。

（小林　秀）

No.	実測番号	種類	器類	出土位置	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
					口径	器高	その他						
1	3-6	土師器	椀	旧河道	13.2	5.0		外：未調整 内：工具ナデ	粗（4㎜以下の砂粒を含む）	並	灰白～灰黄褐色	完形	
2	1-4	土師器	椀	旧河道	12.0	5.3		外：ナデ 内：ナデ	やや密（微砂粒を含む）	並	淡黄色	口縁部1/3	
3	5-2	土師器	椀	旧河道	10.8	4.4		外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の微砂粒若干含	良	にぶい黄褐色	口縁部1/4	
4	6-2	土師器	椀	旧河道	16.0	—		外：ナデ（一部ハケメ） 内：ナデ	2㎜以下の細砂粒多含	良	にぶい黄橙色	口縁部1/8	
5	3-5	土師器	壺	旧河道	6.6	9.5	体部径 9.5	外：ハケメ 内：ナデ	粗（2㎜以下の砂粒を含む）	並	褐灰～黒色	口縁部小片 体部完存	体部外面に煤付着。
6	6-3	土師器	壺	旧河道	—	—	脚部径 10.4	外：ハケメ 内：ナデ	1㎜以下の微砂粒多含	良	浅黄橙色	脚部ほぼ完存	内外面磨滅のため調整不明瞭
7	5-3	土師器	甕	旧河道	10.6	13.2	体部径 14.0	外：ハケメ 内：上半ナデ、下半ヘラケズリ？	1㎜以下の微砂粒含	良	浅黄橙～橙色	口縁部小片 体部1/2	底部外面ヘラ記号。内外面磨滅のため調整不明瞭、一部黒変
8	4-2	土師器	甕	旧河道	16.0	—		外：ハケメ 内：ハケメ	やや粗（2㎜以下の砂粒含）	並	にぶい黄橙～浅黄色	口縁部1/4	外面に煤付着
9	2-2	土師器	甕	旧河道	12.0	12.3	体部径 13.6	外：ハケメ 内：ナデ、一部未調整	やや粗(2㎜以下の小石・微砂含)	並	明褐灰～褐灰色	1/2	
10	5-1	土師器	甕	旧河道	13.6	14.4	体部径 13.4	外：ハケメ 内：上半ハケメ、下半ヘラケズリ	1㎜以下の微砂粒含	良	にぶい黄橙色	完形	内外面一部黒変
11	4-1	土師器	甕	旧河道	15.9	19.4	体部径 17.5	外：ハケメ 内：上半ハケメ、下半ヘラケズリ	やや密（1.5㎜以下の砂粒含）	並	浅黄橙～にぶい黄橙色	3/4	
12	1-1	土師器	甕	旧河道	16.5	18.2	体部径 17.4	外：ハケメ 内：上半ハケメ、下半ヘラケズリ	やや密(3㎜以下の小石・微砂含)	並	暗灰黄～灰白色	完形	
13	2-1	土師器	甕	旧河道	18.2	—		外：ハケメ 内：ハケメ	やや密（微砂粒含）	並	黒～浅黄橙色	口縁部1/2	体部外面一部煤付着
14	6-1	土師器	把手付鍋	旧河道	24.5	—		外：ハケメ 内：ハケメ	2㎜以下の微砂粒多含	良	にぶい黄橙色	口縁部1/4	体部内外面黒変 内外面磨滅激しく調整不明瞭
15	7-2	須恵器	蓋	旧河道	14.0	—		外：ロクロナデ、天井部ナデ 内：ロクロナデ	2㎜以下の細砂粒若干含	良	灰白～灰色	口縁部3/8	ロクロ回転方向不明
16	7-3	須恵器	蓋	旧河道	12.0	—		外：ロクロナデ、天井部ヘラ切り 内：ロクロナデ	1㎜以下の微砂粒若干含	良	灰　白	口縁部1/4	ロクロ回転方向不明 外面一部自然釉付着
17	3-1	須恵器	蓋	旧河道	12.9	3.8		外：ロクロナデ、天井部ヘラ切り 内：ロクロナデ、天井部ナデ	密（1㎜以下の砂粒含）	並	灰白～灰色	口縁部1/3	ロクロ回転方向不明
18	3-4	須恵器	杯	旧河道	12.4	—	受部径 14.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密（2㎜以下の砂粒含）	並	灰白色	口縁部5/6	磨滅のため調整不明瞭
19	3-3	須恵器	杯	旧河道	11.7	4.1	受部径 13.6	外：ロクロナデ、底部未調整 内：ロクロナデ、底部ナデ	密（1㎜以下の砂粒含）	並	灰白色	1/2	底部外面ヘラ記号「｜」
20	7-1	須恵器	杯	旧河道	12.0	4.1	受部径 14.0	外：ロクロナデ、底部未調整 内：ロクロナデ、底部ナデ	密（1㎜以下の砂粒若干含）	良	灰白色	1/3	底部外面藁圧痕
21	1-3	須恵器	杯	旧河道	11.5	3.9	受部径 14.3	外：ロクロナデ、底部未調整 内：ロクロナデ、底部ナデ	密（微砂粒含）	並	灰　色	完形	
22	1-2	須恵器	杯	旧河道	11.3	4.0	受部径 13.2	外：ロクロナデ、一部ロクロケズリ 内：ロクロナデ、底部内外面ナデ	密（3～1㎜の小石・砂粒含）	並	灰　色	1/2	ロクロ左回転
23	3-2	須恵器	壺	旧河道	11.0	8.3	体部径 13.0	外：ロクロナデ、下半ロクロケズリ 内：ロクロナデ、底部ナデ	密（1㎜以下の砂粒含）	並	灰　色	1/4	ロクロ右回転 内面焼き膨れあり
24	9-1	木製品	笏	旧河道	長 50.6	幅 4.5	厚 1.0					完形	笏状の形態を呈するが、用途不明。
25	8-1	木製品	刀形	旧河道	長 37.7	幅 2.0	厚 0.3					3/4	

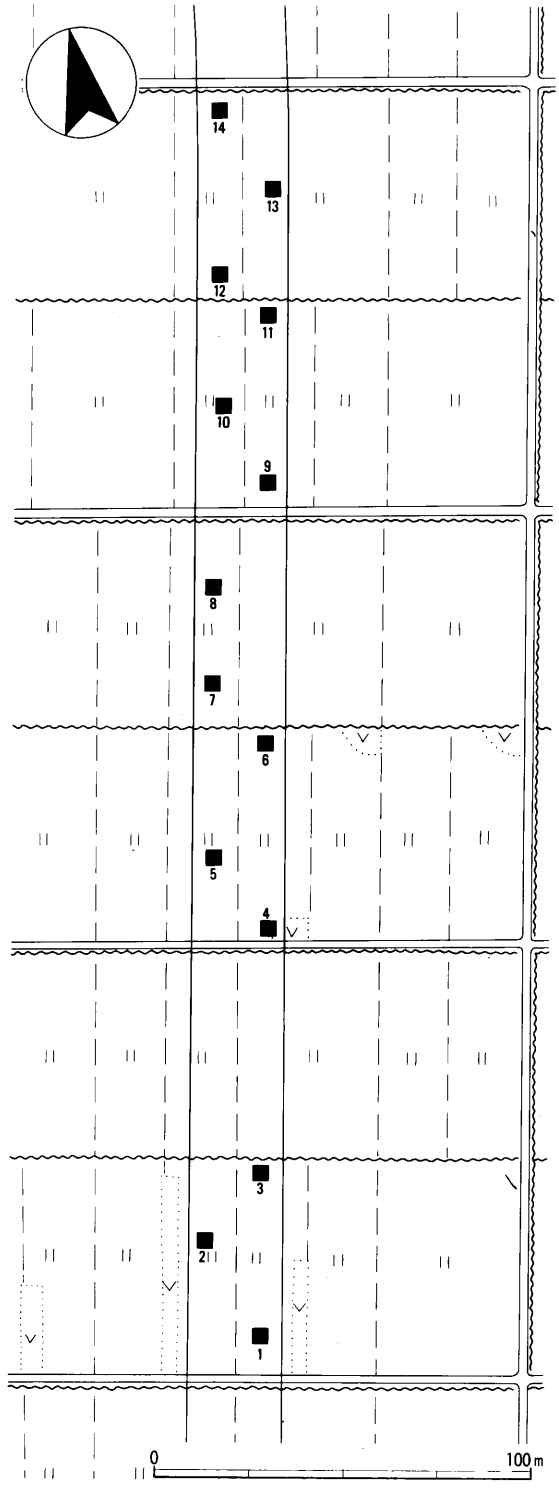
第6表　遺物観察表

V．範囲確認調査

1．御堂山遺跡

松阪市の西野々集落西方、金剛川右岸の沖積平野に位置する。計画路線地内のセンター杭はNo.334～350である。調査は４×４ｍの試掘坑を約20ｍ間隔に14カ所設定し実施した。No.５・７・８・14試掘坑から土師器・須恵器・近世陶器片が出土したが、遺構は検出されなかった。過去の耕地整理によって遺跡が破壊されている可能性もある。耕作土の下には深さ２～３ｍ以上にわたって砂礫が堆積しており、地表下90㎝で湧水層に達する。　　（宇河雅之）

第16図　御堂山遺跡地形図（１：5,000）

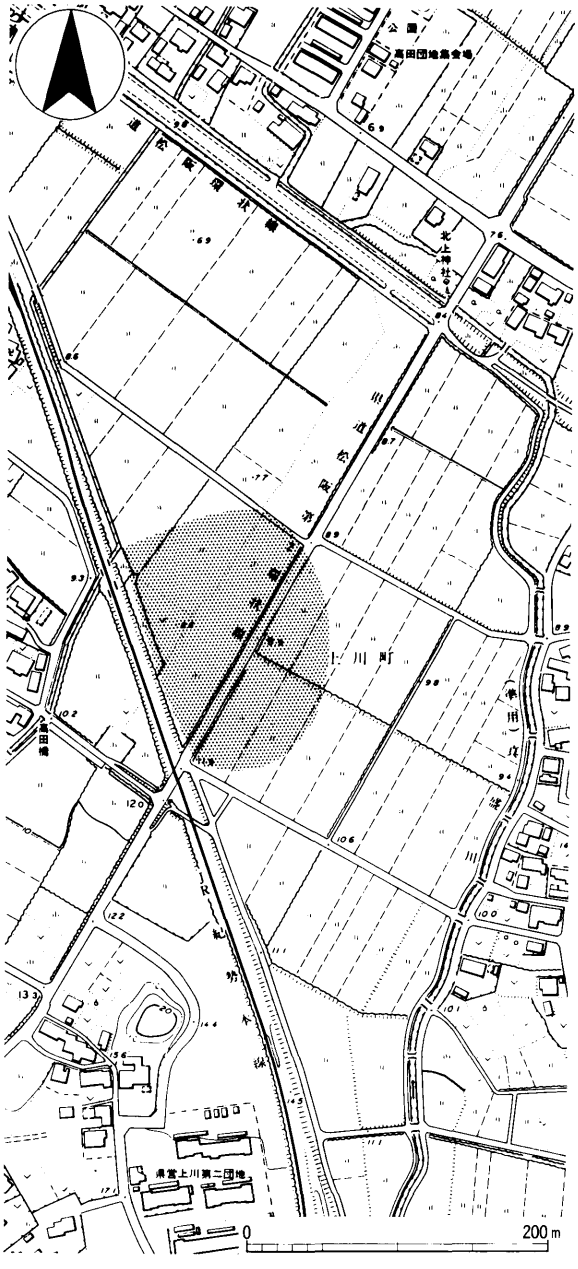


第17図　御堂山遺跡試掘坑配置図（１：2,000）

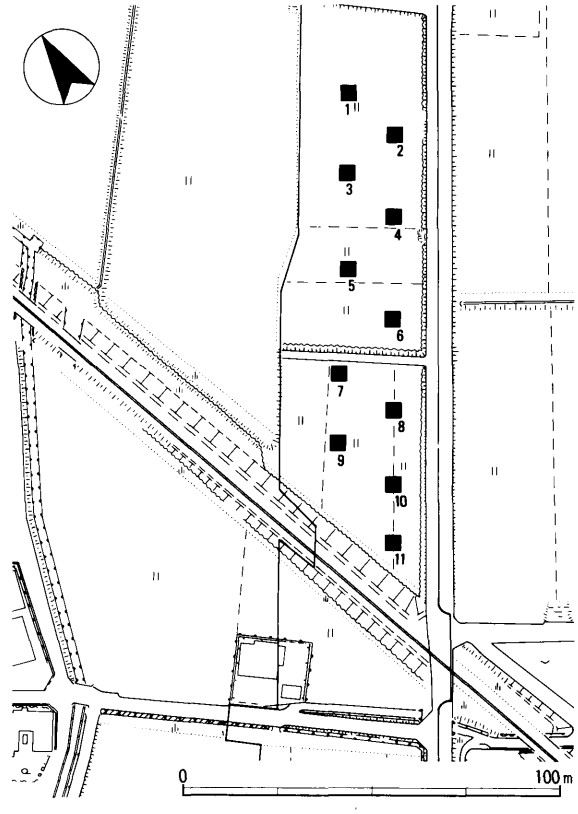
2．中野前遺跡

松阪市のレインボータウン高田の北西方、ＪＲ紀勢線東側に位置する。路線計画地内のセンター杭は、No.167～172である。調査は４×４ｍの試掘坑を約20m間隔に11カ所設定し実施した。各試掘坑の基本的層序は第１層褐色土（耕土）、第２層橙色砂質土（床土）、第３層オリーブ黒に橙色砂質土混入、第４層灰色土に砂混入　、第５層青灰色粘土層、第６層青灰色砂層であった。No.№4・6～8・10・11試掘坑の第１・２層から土師器・山茶椀・天目茶椀（１）・摺鉢（２）・近世陶器などの小片が出土した。しかし、表土と床土からの出土であるため、他所から移動してきたものである可能性が高い。第３層以下も金剛川および周辺の小河川によって形成された沖積地であり、遺構を確認できなかった。

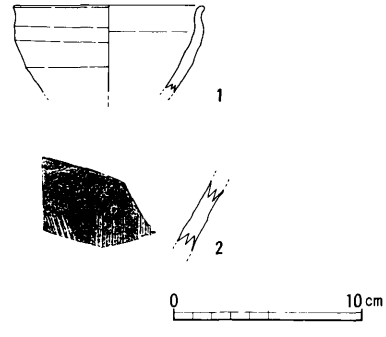
（東良樹・森川常厚）



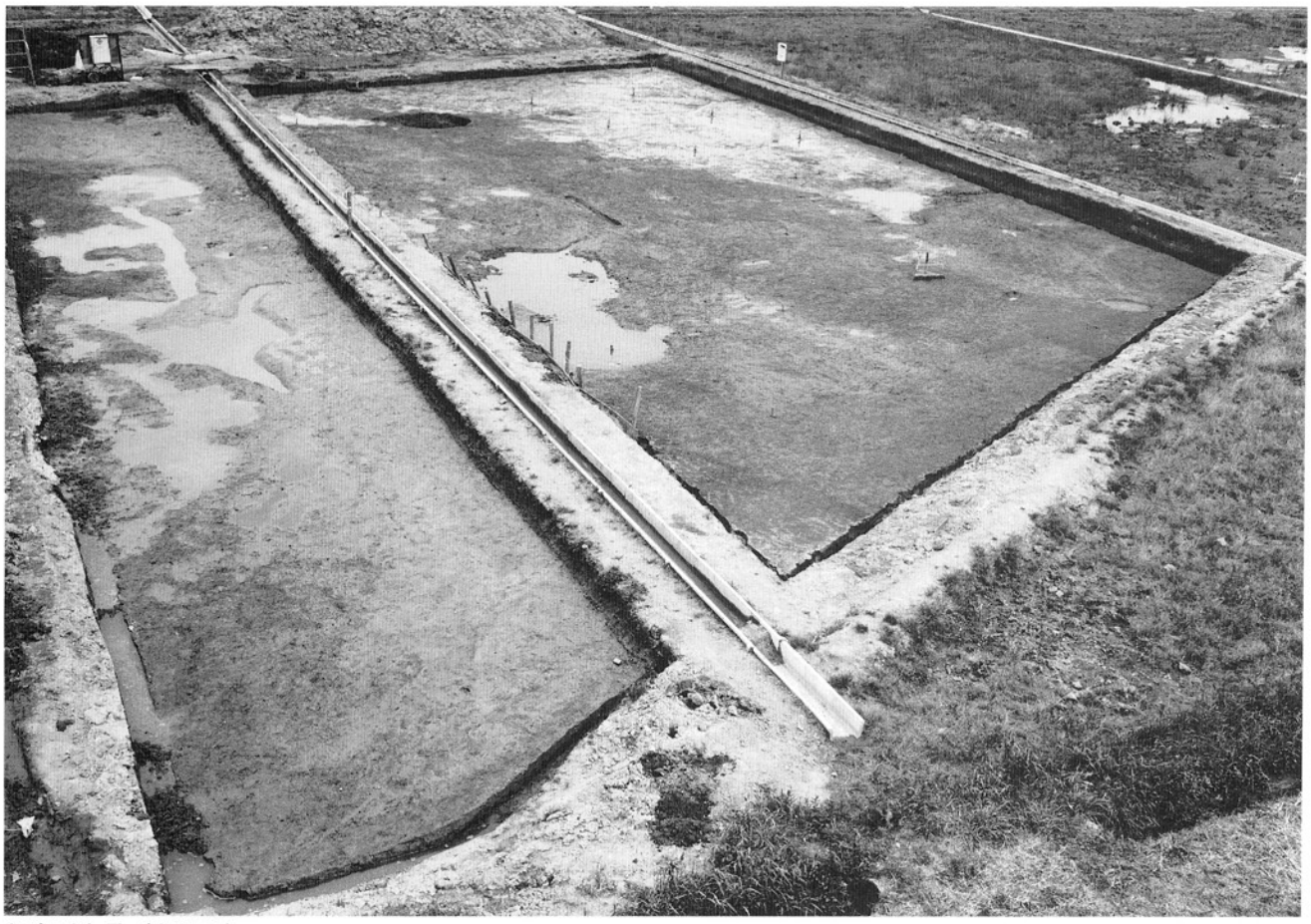
第18図　中野前遺跡地形図（１：5,000）



第19図　中野前遺跡試掘坑配置図（１：2,000）

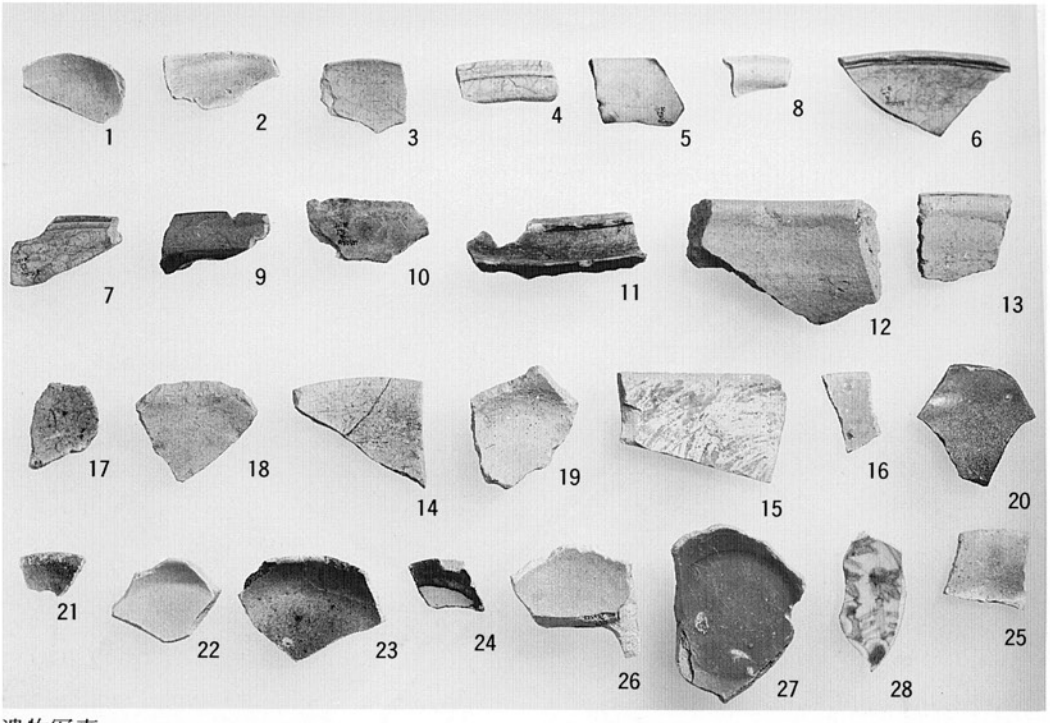


第20図　中野前遺跡遺物実測図（１：４）

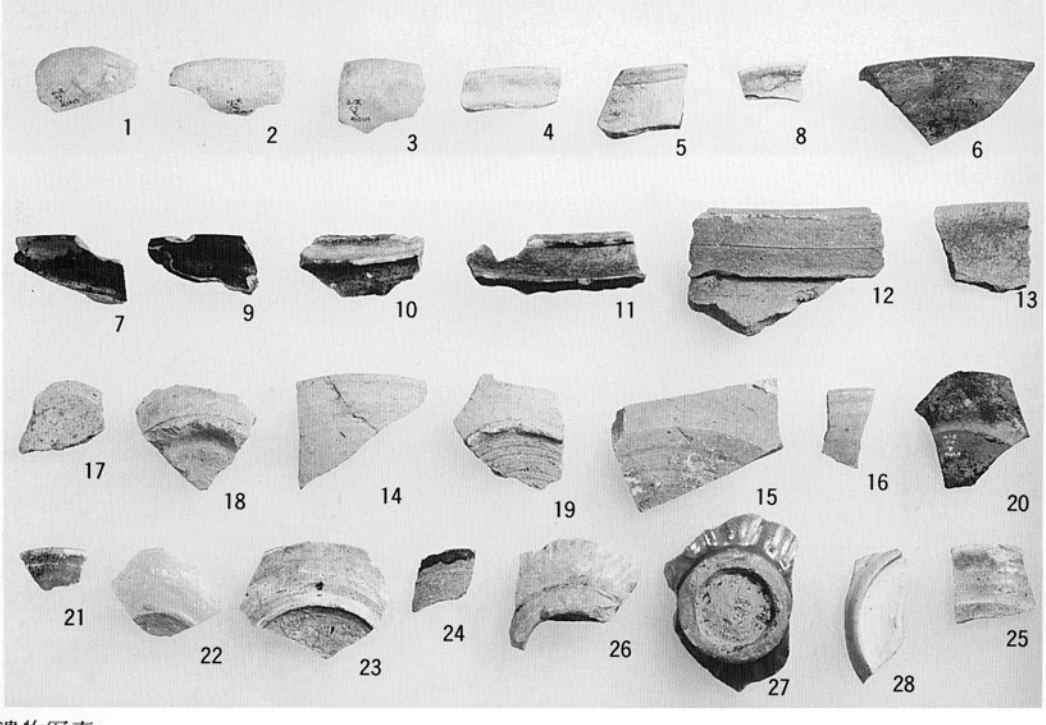


調査区全景（北から）

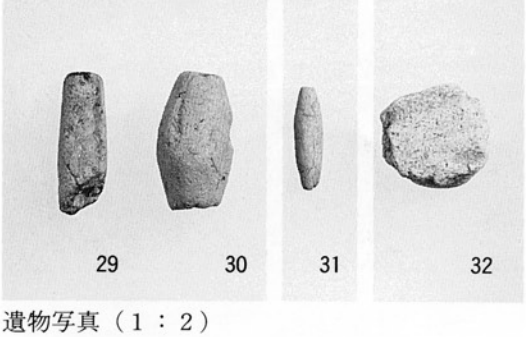
作業風景（南から）



遺物写真



遺物写真



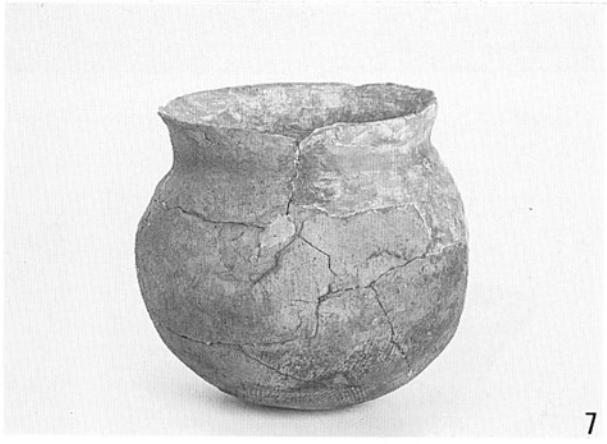
遺物写真（1：2）

調査前風景（南から）

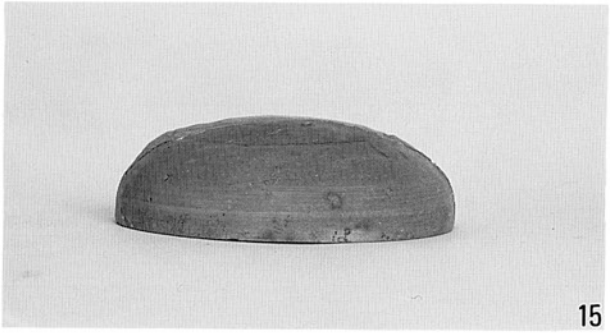
調査区全景（南から）

溝（北から）

調査区全景（南から）

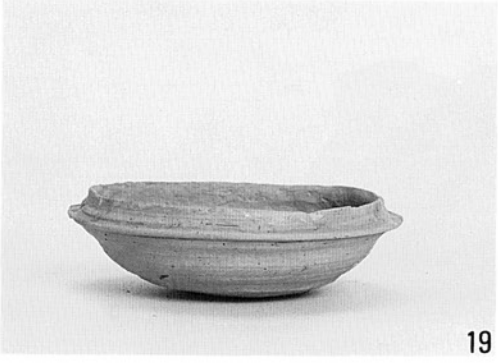


出土遺物（1：3）


15

17

18

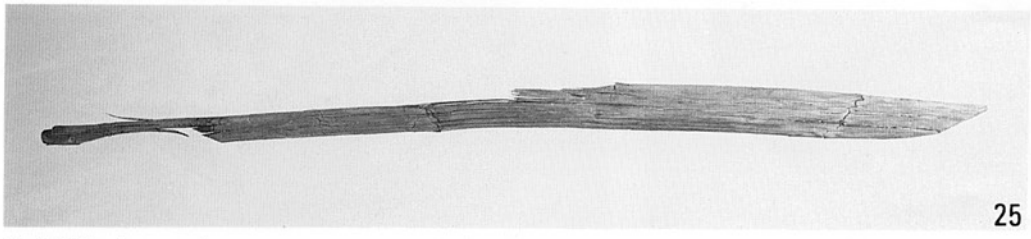

19

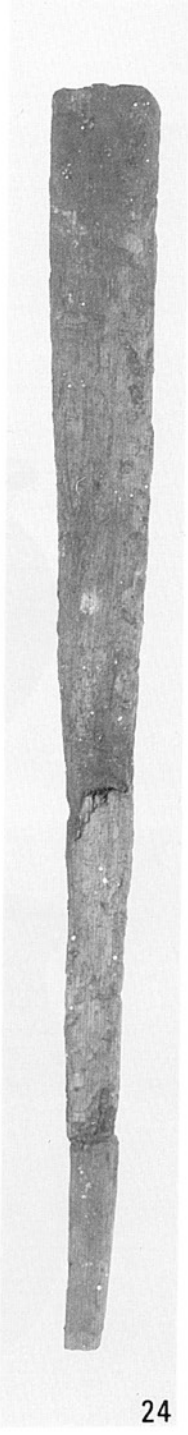
20

21

22

23


25


24

出土遺物（1：3）

報告書抄録

ふりがな	やまのはな　はたち　きたがみいせき
書名	山ノ花・廿チ・北上遺跡
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	123—6
編著者名	田村陽一・森川常厚・松本美先・小林秀・宇河雅之・東良樹
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL　05965-2-1732
発行年月日	西暦1996年11月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
山ノ花（やまのはな）	三重県松阪市古井町大字山ノ花（みえけんまつさかし ふるいちょうおおあざ やまのはな）	24204	未登録	34度34分44秒	136度34分5秒	19950510～19950526	1,300	一般国道42号松阪・多気バイパス建設事業に伴う事前調査
廿チ（はたち）	三重県松阪市上川町字廿チ（みえけんまつさかし うえがわちょうあざはたち）	24204	未登録	34度33分45秒	136度33分47秒	19950607～19950719	1,600	同上
北上（きたがみ）	三重県松阪市上川町字北上（みえけんまつさかし うえがわちょうあざきたがみ）	24204	未登録	34度33分36秒	136度33分42秒			同上
御堂山（みどうやま）	三重県松阪市西野々町字御堂山（みえけんまつさかし にしのの ちょうあざ みどうやま）	24204	未登録	34度34分20秒	136度34分5秒	19930126～19930127	224	同上
中野前（なかのまえ）	三重県松阪市上川町字中野前（みえけんまつさかし うえがわちょうあざ なかのまえ）	24204	未登録	34度33分25秒	136度33分46秒	19940926～19941005	176	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山ノ花	集落跡	鎌倉時代～江戸時代	土坑　3基 溝　1条	土師器　陶器　施釉陶器 磁器　土錘　加工円盤	
廿チ	集落跡	不明	溝　1条	土師器　須恵器　陶磁器	遺物大半は、客土からの出土
北上	集落跡	古墳時代後期	自然流水路　1条	土師器・須恵器 木製品（刀形・笏状）	
御堂山	集落跡	江戸時代	——	陶磁器　瓦	
中野前	集落跡	鎌倉時代～室町時代	——	山茶椀・土師器・天目茶椀・陶器	

平成8(1996)年11月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 123-6

山ノ花・甘チ・北上遺跡

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ

1996年11月　発行

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷者　オリエンタル印刷株式会社